（これは、青年学生に本原書の内容の一端を知らせるため、研修用として一部を抜刷したものである）

黒上正一郎著

聖徳太子の信仰思想と日本文化創業（抜刷本）

社団法人 国民文化研究会

（これは、青年学生に本原書の内容の一端を知らせるため、研修用として一部を抜刷したものである）

黒上正一郎著

聖徳太子の信仰思想と日本文化創業（抜刷本）

社団法人 国民文化研究会

復刊のことば

いまから三十七年前（昭和五年九月二十一日）に、數へ年でいまだ三十歳といふ若さでこの世を去られたのが、この本の著者黒上正一郎先生であつた。正規の学歴といへば、四國徳島の商業学校を出られただけといふ、いはゞ日本教學の正道を歩まれた學徒ではなく、まさにその言葉通りの、若くして世を去った「篤學の士」であられた方である。

こゝに復刊を試みたこの本の原本は、黒上先生の御生前に、先生の御指導を得てゐた「一高昭信会（舊制の第一高等學校の中にあつた文化団体）」によつて、學生の輪読用に出版された謄寫刷り本と、その後、先生の御逝去の五年後（昭和十年）に、同じく同会で出版された立派な装幀の活版刷り本とであつた。後者は、戰時中何版かを重ね、その紙型は戰時中に焼失し、爾来長く上梓の機會に惠まれることがなかつた。

しかし戰前・戰中においてこの本は、当時の全国高等専門學校ならびに各大學の學生たちに、どれほど心讀されたことであつたであらうか。この本に窺はれる著者の　聖徳太子研究の姿勢は、日本の高等教育で教へる知識偏重の學道とは、本質的な相違を示してゐたので、當時の心ある青年・学生は、この本から「学問ならびに人生に取り組む姿勢」について、測り知れない示唆を受けたからである。

青年・學生たちは、當時でも、この本をまことに難解な書物と考へ、「何回讀んでも中々よく判らない」と話し合ひながらも、しかも、文章の行間ににじみでてくる著者黒上先生の、祖國日本に寄せる篤信の心情に心

打たれ、また、外國文化を攝取した上代日本文化を見るその見方についての、すばらしい開眼の機縁に触れる喜びを体験したものであつた。青年・學生たちが、いつも本書を肌身離さず小脇に抱へてゐる光景がよく見られたのも、おそらくそのためであつたことと思ふ。

こゝに、戰後二十一年を經過してやうやく復刊に辿りついたわけであるが、これからのちも、きつと大勢の青年・學生諸君が、この本に取り組んでくださることと思ふ。なぜならば、現代日本の高校・大學の教育の中では、容易に得られ難い學問分野、すなはち「心の姿勢を正すための」學問の道が、著者黑上先生の若々しい情熱と熱烈な求道精進の背景のもとに、この書物の中に縱横に登場してくるからである。日本の高校・大學の教育が、他日その知性偏重を修正する時期を迎へるときがあれば、この本はその轉換の內容を、ある意味で先驅的に示唆したことになるかも知れない。また、ぜひさうなつてほしいものと思ふ。

さて、著者黑上先生と、この本の內容とを簡單にご紹介しておきたい。黑上先生は、明治三十三年（九月二十四日）德島市の素封家の嫡男として生れ、慈愛深い母上の下で商業學校を出られ、阿波銀行に勤務された。聰明にして鋭敏な宗教家の素質は、少年時代から芽生え、獨學で親鸞、日蓮の經文を學びさらに聖德太子の研究に進まれた。その後上京されて、入澤宗壽、藤原猶雪、三井甲之、井上右近その他の諸師に師事され、聖德太子の研究においては、劃期的な境地を開拓されたのである。その風貌は、本書の巻頭の寫眞のやうに、若年乍ら端嚴なる聖僧の如く、柔和にしかも熱烈に、誰彼を問はず、說き敎へて倦むところを知らず、同時に本書

の述作には、一語一句に心血を注がれたといはれてゐる。當時、昭和三年の三・一五事件の後、渦巻く共産主義運動の熾烈を極めた中に、第一高等學校に昭信會を、東京高等師範學校に信和會を、それぞれ研究グループとして作り、著者は、悠々として毅然たる態度を以て學生を指導し、太子の御精神を若い次代の青年に伝へたのである。

古来、仏教家、史學者の聖徳太子研究は數多くあるが、本書の如く太子一代の御事業を、その悲痛なる宗教的人生觀に徹入しながら説き明かしたものは殆んど類例をみない。

本書に於ては、日本文化史上の二つの重大轉機として、推古朝と明治時代が採り上げられてゐる。前者は外来宗教としての佛教の批判攝取の時代、後者は徳川幕府の崩壞と共に、西歐の學術思想の潮流が一時に押し寄せた時代で、この重大問題は今日只今もなほ、我々自身の問題として切實に迫りつゝあるものである。著者の念願は、一研究家として自らの研究を完成することよりも、聖徳太子と明治天皇御二方が、政治活動と教育教化とを一致せしめながらこの世を送られた御念願を承繼して、次代の日本を背負ふべき人材を育成する所にあつた。惜しいかな健康に恵まれなかつた著者は、昭和五年九月、わづか三十歳で徳島に歿し、本書一冊が遺書となつた。

著者黑上正一郎氏が、三十年の短い生涯に、全身心を傾け盡して書きしるした本書の文章は、著者の切々たる情意に支へられ、本書全體が高いしらべの長詩の如き調子をもつて、讀む人の心に迫るものを感じさせる。本書を知る人々の間で、本書が永く心の糧として愛讀されて来た所以もそこにあり、また戦前戦後の大きな變

革に遭つても、變りなき憧憬と敬慕が本書にそゝがれ、本書の再刊を現代の青年學生達のために、また研究グループの輪読のために切望する聲が高まつて来た理由もそこにあつた。

幸ひにして幾多の困難を越えて、こゝに上梓の運びに至ることを得て、朝野各方面からの御支援に深甚の謝意を表するものである。また發行について、文部省の社会教育課の方々をはじめ、解説、註釋、ふりがな、その他編集については當會の役員・會員の方々にすくなからぬご協力をいたゞき、また印刷については東京堂出版の石井良介氏といづみ印刷の森泉政雄氏にたいへんにお世話になつたことを厚く感謝する次第である。

なほ巻末には因縁ふかい參考資料を種々載せたが、とくに（その三）の時代解説は、聖徳太子の時代を現代の若い人々のために解説したものであつて、本文より先に読まれることによつて、當時の時代を念頭に入れて本書を読んでいたゞければ何かのお役に立つことゝ思ふ。

昭和四十一年三月

社団法人　國民文化研究會

理事長　小田村寅二郎　識

聖德太子の信仰思想と日本文化創業

黑上正一郎著

序說

東洋文化の傳統及び理想を正しく現實に把持するものは我が日本である。大乘佛敎及び儒敎の如き東亞大陸の代表的文化は、すでにその本國に於いて衰頽せるに拘らず、共に我が國土に朝宗して國民生活の體驗に融化せられ、その生命を持續開展せしめられて居る。日本文化とは實に東洋文化の綜合としてのそれであつて、それは西洋文化と對照補足せらるべき世界文化の重大要素であり、この文化を把持する我が國民は更に東西文化融合の世界的使命を負ふものである。

日本が過去に於いてかくの如き文化史的偉業を成就せしことは、それが全體國民生活の所產であることはいふ迄もない。けれども國民文化の史的開展は背後に偉人天才の努力と指導のあ

りしことを顧みなければならぬのである。此に偉人天才とは單なる英雄偉人を指すのではない。それは眞に苦惱濁亂の人生に徹し、蒼生の共に歸趨すべき大道を體得して、之を實生活の複雜關聯と不斷轉化の裡に實現せられたる綜合的指導精神の具現者をいふのである。

我が國民生活は外來文化との接觸によつて前後二回の重大轉機に遭遇したのである。先に東洋文化を受容せし推古朝と、後に西洋文化を輸入せる明治時代とは正に此の二大轉機に外ならぬのである。而も國民はこの重大時機に當つて、かくの如き指導的人格を國民生活の核心たる皇室に仰ぎまつゝたのである。近く　明治天皇の大御稜威の下に、わが民族が內、平等に皇化に浴せしめられ、外、世界文化に有力なる地位を確立したることは、われら國民の等しく仰ぎまつるところである。この心は又遡つて推古朝の時代に大陸文化を批判綜合し給ひ、わが國民を哀愍教化せられたる　聖德太子を憶念しまつるのである。

聖德太子は、我が國民生活の未曾有の轉機に出現せさせ給ひ、當代大陸の思想學術を博綜し給うたのである。卽ち太子は、國民教化の理想に於いては大乘佛教を融化し給ひ、また現實國家の治道に就いては儒家・法家の思想をも採擇せられたのである。けれどもこれらを統一して生命あらしめしものは、實に我が日の本の皇子として生れさせ給ひ國民を治らし給ひし信念體驗であつた。されば太子が法華・勝鬘・維摩の三經に親ら註釋を加へて殘させ給ひたる上宮御

製疏は、單に本邦最初の個人的創作といふ外的見地を以てのみ見らるべき文献ではなく、正しく憲法拾七條と共に、其の一代の信念に大陸の宗教・學術を批判綜合して、國民永遠の教化原理を開示したまひしところの聖典である。太子一代の內政改革、又我が國際的地位の確立の如きは、共にこれ等の御著作に現はれたる大陸文化批判綜合の內的事業にその基を置かれたのである。

山鹿素行は中朝事實（禮儀章）に於いて太子が隋の煬帝に遣し給ひし「東の天皇敬んで西の皇帝に白す」の國書について「唯に太子の大手筆のみに非ず、其の志氣洪量にして、能く本朝の中華たるの所以を知る也。」と論じてをる。卽ち太子が當代支那と對等の交際を開かせ給ひ、國威を海外に宣揚し給ひしところの事實を以て、その能く本朝の本朝たる所以を知ろしめし、國民的信念に歸着し奉つたのである。一代の外的事業も更にその依つて來るところの內的自覺に之が意義を窮めたる史的洞察は、今太子を憶ひまつる者のふかく回顧すべきところである。

太子が常に皇化を全國民に遍ねからしむべき御心の下に「和を以て貴しと爲す」といふ同胞協力の信を具現し給ひ、こゝに「群臣共に信あらば、何事か成らざらむ。群臣信なきときは萬事悉く敗る」と仰せられ、くもりなき誠に國民が一致融合するとき、國家生活の生命は一切の波瀾を打破して開展し得べきを示させ給ひたるは、正にこの國民的信念の內容を偲ばしむる

のである。而も三經義疏には到るところ苦を忍びてひろく衆生を濟度すべしといふ大慈悲教化の精神を宣說し給ひ、この平和協力の信を以て、更に一切群生を開化すべき廣大の念願を顯示せさせ給ふのである。

太子は實に其の政治的施設に於いて國家生活の進展を確保すべき用意を組成せられたるのみならず、更に之を支持すべき精神的事業に於いて、世界を指導すべき國民的信念を顯現し給ひ、我が日本の永久的基礎を確立し給うたのである。太子は偉大なる政治家にましまし、と同時に、また衆生永遠の教育的人格にましますのである。千三百年に亘る日本文化開展の歷史は、この偉大なる精神に依つて正しくその根基を建設せられたのである。

聖德太子の三寶興隆は、この國民的信念の下に行はれたる衆生教化の大業であつた。

されば我が教化史上、國民は太子を奉讃するに屢々眞諦俗諦の相依(一)を具現したまひし理想の宗教的體現者を以てしたのである。卽ち傳教大師は大乘眞實の教法としての天台法華宗を日本國土に興隆せんとして、維摩經の眞俗不二の思想を辿つて太子を回顧し、ここに大乘教化活動の典型的實現者を仰いだのである。また親鸞聖人は「和國の教主聖德皇」と歸命して日本宗教の開祖としての太子を憶念し、その門流をして永へに「蓋しこれ王法を以て佛法を廣め、

眞諦を以て俗諦を守る。眞俗二諦並び生ず」（傳存覺作太子講式）といふ如き言葉を以て讃仰せしめてをる。これらは共に吾が祖先の太子に對する奉讃心を表現するものである。こゝに眞諦俗諦の相依といふ、その眞諦とは宗教的眞理を、また俗諦とは政治經濟生活を指すものと見てよい。卽ち佛教も太子に依つて單に專門僧侶の特殊教團生活にのみ依るものではなく、それが政治活動の體驗に生きしめられ、こゝに信仰思想と現實生活との一致融化を實現せられたることを奉讃せるものである。

（註一、宗教生活の理想と實生活のそれとが表裏一体であること。）

凡そ東亞の國々に於いて三寶興隆のために貢献せる帝王は必ずしも少くはない。而もその人々は傳統的教義に對する誠信の受容者であり、また佛教教團の熱心なる外護者であつたらうけれども、其の信仰教理を自ら國家生活の體驗に融合し、その精神永く一國教化の趨向を照明せし如きは、殆ど之を見出す能はざるところである。眞に教化と政治との融一を實現する如き精神原理は其の人々に依つては示されなかつたのである。こゝに太子が我が文明の源流に立つて御身親ら眞俗相依の範を示させ給ひ、大乘佛教を國民的信念に統一して、政治道德活動を內容とする人生宗教を廣宣流布し給ひし御心は、永く國民の仰ぎまつらねばならぬところである。ここに外來の宗教教義は國民文化の開展要素として融合せられ、同時に大陸佛教の理想そのもの

も、また現實國土の道德活動にその生命化の鄕土を見出したのである。東亞數億の宗敎心を代表する佛敎がすでに本國に於いて衰頽せるに拘らず、日本國土に其の生命を開展せしめられ、永く世界文化の上に其の意義を保持せしめられつゝあることは、正しくこの偉大の御精神に依つて之が統攝され、遺敎とこしへに國民敎化活動の進路を支配せしがためである。太子の信仰思想の裡には既にわが國の世界人道的使命が發現せられてあつたのである。

われらはかくの如き御精神の表現をうつしく三經義疏の內容に仰ぎまつるのである。

この三經義疏に示されたる思想信仰は、すべて「群生と苦樂を共にす」（文殊問疾品）と宣ひし平等大悲の敎育精神に歸結せしめられたのである。凡そ國家生活が單に制度政策の外的形式にのみ向ふときは、之を支持すべき內的生命の源泉を枯渴するに至るのである。こゝに太子が一代施設の根柢に常に敎化の大業を伴はせ給ひ、國民を等しく永久生命の大道に和融して、信に基く同胞協力を實現せんと盡させ給ひし御心は、一切の政治的建設に生命をあたへ給うたのである。儒家・法家の文獻に現はれたる支那民族の政治道德思想も、又この御精神に批判統御せられ、此にその選擇攝取の內的規範が明示せられたのである。

けれども太子はこの偉大の御精神を運用するに、常に國家と時代との現勢を洞察したまひ、

空虚の理想に依つて、急激の改革を行はせ給はざりしと共に、又内政外交の宿弊に對しては、之が不斷革新の原理を大陸文化批判統一を成就すべき國民的信念に求め給ひ、之を國家統治の實際に具現し給うたのである。この現實的施設に國民永遠の大道を貫かせたまひし御心に依つて以後に於ける國民文化開展の素地は作られたのである。殊に内外多事の御生涯に自ら三經義疏の御述作にみ心を勞させ給ひ、無窮の國民生活を念じて永遠の信に基く教化の大願を、また世界的日本の進むべき大道を開示し、永く教育教化を以て國家國民を護らんとし給ひし事實は、今更に限りなき御心を仰ぎ偲ばしむるのである。

太子が三經義疏の何れにも釋尊が經典の流通分㈠を説いて聖教を後世の衆生に流傳せんとせられたる精神を論じて、

「而るに大聖慈を垂れて法を説き給ふことは、但に當時に利を獲るのみにあらず、遠く末代に及びて皆同じく福あらしむ。故に末に卽ち爲に流通を説きて以て之を勸むるなり。」（勝鬘經義疏序説）

と示し、又法華義疏（巻三）信解品に釋尊が大乘の解を失へる衆生に對して尙大乘の法を以て教化せられたる所以を釋して、「夫れ聖人の説法は但に當時に利あるのみにあらず、遠く後益を取るなり」と宣ひし如き、共に遷して以てこの御精神を顯すものと見ることが出來るのであ

る。國家事業の實際に盡させ給ひつゝ、常に一時の外的功業に止まらせ給はずして、國民生活の永遠のため其の教化救濟の內的建設に盡させ給ふ、これまことに三經義疏撰述の內的動機と仰ぎまつるのである。

日本文化創業の大任を成就し給ひし御心を無窮の世に傳ふる三經義疏の御文は、建國の神典古事記と共に國民文化の淵源を示す寶典として今日殊に讀誦研究せらるべきことを思ふものである。

（註二　經典の全體を序說、正說、流通說（分）の三に分かつ。）

されば太子に關する研究は單に一代の功業の事蹟に止まらず、其の功業の依つて來るところの信仰思想の內容に徹入し、ここに東亞大陸の文明を選擇融化して國民文化の根柢を確立したまひし內的偉業の眞相を窮盡すべきであつて、これ我が文明の世界的意義を光闡する所以であると共に、又東西文化交流の中心にある現國民精神生活にとつて、その指導的光明をあたふべき重大の研究であると信ずるのである。

既に述べたるが如く三經義疏は、太子がその國家統治の根本精神を開闡したまひしところの拾七條憲法と表裏して、世界に出づべき我が國民生活を指導せられたる御精神を永久の世に留め給へる聖典であつて、單に佛教教義の說示のみを目的とせる書ではない。されば之が研究に

於ても、單に一般佛敎の概念形式を以て批判解釋するが如きは、決して御心を闡明する所以ではないのである。その概念的表出に於いては、或は大陸佛敎、また儒敎のそれと同じきが如く見ゆる箇所ありとも、之が具體的內容を表現せさせ給へる御言葉の微妙の脈絡は、常に太子自らの痛切の御體驗を顯示するのである。故に太子の御著作の研究は、單に語義分析、また敎理的研究にのみ蹋蹐することなく、常に之が御選述の內的動機を憶念し、國民的讃仰の一念に基きて、其の御言葉の心理的內容に徹到すべきであつて、これらの分析的研究と又外的功業の叙述とはここに統御せられて始めて之が意義と價値とを生ずるのである。凡そ精神科學的研究は人生そのものを對象とするが故に、冷靜なる學術的研究もまたそれが研究者の體驗に統一せられて生命を得るのである。殊に悠久の國民生活を照したまふ御心の表現に對しては、研究そのものも亦現實生活に於ける憶念の信の實現を念とし、同信師友の協力によつて無窮に相續せらるべきと共に、又それは御心によつて開發せしめられたる研究者の信念告白を內容たらしむべしと信ずるのである。

けれども太子の御出現は實に我が國の歷史傳統と民族固有の精神生活とを根柢として考察せねばならぬのであつて、太子の大陸思想批判綜合の御精神を窮めんとすることも、それは軈て記紀萬葉の精神と表裏出沒する民族的生命の開展を探求することゝなるのである。記紀の歌謠

神話に表現せられたる如き民族精神が世界文化と接觸(せつしよく)して之を統御せし歴史は、實に太子の信仰思想に於いて、その光輝ある內容の源泉を見出すのである。こゝに上宮御製疏(じようぐうごせいそ)並びに憲法拾七條の研究は、卽ち日本精神の綜合的表現者としての太子の御精神を窮盡(きゆうじん)することゝなるのである。故に一代御著作の內容は常に記紀萬葉のそれと脈絡照應(みやくらくしようおう)せしむべしと信ずるのである。

第一編　聖德太子の人生觀と政治生活

聖德太子は固有民族文化と大陸文化との交流接觸の時代に出現せさせ給ひ、當代大陸の思想學術を博綜し給うたのである。けれども太子に於いてはこれらの思想學術はすべて切實の求道體驗に融化して開展せしめられたのである。國家重大の轉機に國民生活の運命を荷はせ給ひし御心は、時代の痛苦濁亂を啻に客觀視し給はずして、先づ自らを省みさせ給ひ、全體生活の開導教化を念じて求道精進し給うたのである。維摩經義疏に、經典に

「若し自らに縛有りて、能く彼の縛を解かんは、是の處有ること無し。若し自らに縛無くして、能く彼の縛を解かんは、斯れ是の處有り。」（文殊問疾品）とある佛語に對し、深く思想と實行との關聯を論じ給ひ、その最後に次の如く示し給ふ御言葉は、正しく此の御精神を顯すのである。

「何となれば則ち若し天下の道理を論ぜば、惡を遣り善を取るは必ず己に始まりて方に能く人を勸む。若し自ら能くせずんば安んぞ人を進むるを得む。」

太子は攝政の大任をうけさせ給ひてより、當代の氏族制度の積弊に基く內政の紛亂に對し、これが不斷改革のため苦闘し給うたのである。けれども實際政治の革新は太子に於いてはつね

に國民精神生活の内的改革に基かねばならぬことを信知し給うたのである。一代の内治外交が三寶興隆の教化事業と表裏せしめられ、憲法第二條に「篤く三寶を敬へ」と仰せられ、これを「人尤だ惡しきもの鮮し。能く教ふれば之に從ふ。其れ三寶に歸せずんば、何を以てか枉れるを直さむ」と結び給ひたるは、實にわが國民の靈性を信ぜさせ給ひ、教育教化に依つて國家生活の内的根柢を確立せんとし給ひし御心を顯すのである。けれどもこの内的改革は太子に於いては先づ之を自らの御心に實現せられねばならぬものであつた。太子がこゝに「天下の道理を論ぜば」と宣ふのは、その求道精進が啻自らの解脱のためにあらずして、國民の共に歸趨すべき大道の實現にあつたことを示すのである。而も「惡を遣り善を取るは必ず己に始まりて方に能く人を勸む。若し自ら能くせずんば安んぞ人を進むるを得む」との强き御言葉は、實にこの内的改革を先づ自らの御心に具現するに非ざれば、眞に國民同胞を救濟すること能はじと信知せさせたまひたる、内心の生の戰の深刻なりし事實を偲ばしむるのである。

この太子の人生觀は維摩經義疏に自ら聲聞・凡夫・菩薩㈠の内的相違を論じたまふ内容に最も明かに顯示せられて居る。卽ち維摩經佛國品に毗耶離園に於ける佛陀が說法の會座を敍し、その同聞衆を擧ぐるに比丘・菩薩・凡夫の順序を逐へるに對して、之が内的意義を論じたまひ

「二には理に就いて論ぜば、聲聞（の人）は生死を厭ひ涅槃を求む。凡夫は生死を愛し涅槃

を畏る。二つながら皆佛の深旨に違き俱に中道を失へり。故に之を前後の二邊に列ぬるなり。菩薩は心益物を存するが故に生死を厭はず、萬德常果を證せんと欲するが故に涅槃を畏れず。（二乘）凡夫の偏に同じからずして妙に中道を得たり。」

とあるもの卽ちこれである。こゝに聲聞とは卽ち小乘教徒を指すのである。人生の痛苦無常を觀じ生死の解脫を願ふ心はこれを否定すべきではない。而も彼らが解脫を一我の天地に願求して他と共なる人生を顧みざる思想は、つひに現實生死の裡の苦鬪を厭ひ、理想を現實生活の外に求むるに至るのである。太子はこの個人的超脫の人生觀を排し給ふのである。けれども生死意欲の煩惱罪惡の儘を愛し、發心求道の念慮なき凡夫の生活も亦決して眞實の道ではない。太子は常に大乘菩薩の願行を念じたまふのである。心つねに衆生救濟の慈悲を抱くが故に生死動亂の間に處して厭はず、永久生命の信を念ずるが故に發心求道の願を相續するもの、これまことに太子の示させ給ひし道であつて、勝鬘經義疏に自ら仰せられて、

「大士の懷を立つることは、但自らの爲には非ず、必ず先づ物の爲にすることを明かすが故に、衆生を安慰せんと言ふ。」（三大願章）

とあるは、更にこの御精神を顯彰するのである。

（註一、声聞は、縁覺、菩薩と共に三乘の一つ。佛陀の聲教を聽聞して直接悟達する者。縁覺は、佛陀の教法を

基としつつも外縁に依って悟道する者。共に自己本位の解脱者。）

蒼生と共なる生の故に解脱を自らの爲に求め給はず、而も眞實生命の信に基きて國民の教化救濟を先にと念じ給ふこの大きいつくしみの裡にこそ、天下の道理は具現せられ、國民文化の根柢は確立せられたるを仰ぎまつるのである。

けれどもこの教化救濟の御精神は、更に全體生活に滲透するところの偉大なる人格の求道苦闘によつて表現せられたのである。我が文化創業の大任を荷ひて國民生活を養育せられたる御心は、其の教化的御念願も單なる救濟思想によつて實現せられたのではない。憲法第拾條の教示は卽ち正しくこれを示すものである。

「忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり。心各々執あり。彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず。彼必ずしも愚にあらず。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎ぞ能く定むべき。相共に賢愚なること、鐶の端なきが如し。是を以て、彼の人瞋ると雖も、還つて我が失を恐れよ。我獨り得たりと雖も、衆に從ひて同じく擧へ。」

これまた憲法第一条の「和を以て貴しと爲し、忤ふことなきを宗と為す」の啓示と照応するのである。この教示は當時の有司に對し、忿瞋の絶すべきを教へ、共に完成せざる現實の我な

ることを自覺して融合親和して公に盡すべきを示すものである。而も太子は此の教示の中に「人皆心あり。心各々執あり」と宣ひ、各自の個性または趣向を異にする人生は、其の思想・見解の相違を來すこと多き事實を照したまひ、こゝに「彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす」といふ矛盾相對が人生に免る能はざるところとなるを示したまふのである。されば自ら其の缺陷罪惡を省みずして各々個人我を中心とするときは、融合平和の人生は永久に實現すべからざるを宣ふのである。ここに「我必ずしも聖にあらず。彼必ずしも愚にあらず。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎ぞ能く定むべき。相共に賢愚なること鐶の端なきが如し」と仰せられ、共に同じく不完全の凡夫たるにめざめ、他の違ひを責めずして自らその至誠を盡すとき、眞に團體生活の道德生活は實現せらるべきことを教へたまふのである。人生是非の道理は缺陷ある個人我を中心としてのみ定めらるべきではない。この懺悔求道の至誠に基く團體協力の精神に依つて自ら之を照明せらるべきを宣ふのである。

これ自らにとつては不斷の求道努力を志し給ふ自督の至誠心であり、他に向つては內的平等の信を以て融合親和を念じ給ふ寬容の慈悲心である。氏族朋黨の個我に迷執し、國家公共を念とするなき多數群臣に對し、この人間內心に徹する求道精神を以て共に全體協力を實現すべき信念を啓導せさせ給ふ御心は、內治外交と國民教化との相卽を成就したまひし一代事業の依つ

て來るところの人生觀內容と仰ぎまつるのである。

凡そ人生是非の道理に對し、其の固定的觀念を排し、凡聖・賢愚の外的差別を打破する思想は、既に佛教空觀の哲理に存せぬのではない。卽ち維摩經弟子品に須菩提尊者が自ら解空第一㈢と計するに對し、維摩居士が之を彈呵㈢する中に、

（註二、解空すなわち「空觀の哲理」を解せること、佛弟子中第一人者の意。）
（註三、批判する。）

「若し須菩提、婬・怒・癡を斷ぜず、亦與俱なはず、　身を壞せずして、一相㈣に隨ひ、癡愛を滅せずして、明脫を起し、五逆㈤の相を以て、解脫を得、亦解せず、縛せず、四諦㈥を見ず、諦を見ざるにあらず、果を得るにあらず、果を得ざるにあらず、凡夫にあらず、凡夫の法を離るゝにあらず、聖人にあらず、聖人ならざるにあらず、一切法を成就すといへども、而も諸法の相を離るれば、乃ち食を取るべし㈦。」

とある如きも、之が一例であつて、文中、凡夫に非ず、凡夫の法を離るゝに非ず以下の內容の如き、卽ち凡聖彼我の相對的觀念を超絕して始めてそこに一切に囚はれざるべき眞實解脫は成就せらるべきことを示すのである。また同經同品に迦葉尊者が自ら勝田㈧の德ある聖なりと計して行乞し、特に貧里を憐んで福田行㈨を修せるに對し、維摩が其の慈悲不平等を彈呵し、更

に施について凡聖何れに施すも施者同じく福あつて差別あらざるを示し、「一食を以て一切に施し、諸佛及衆の賢聖を供養し然る後食すべし。」等とある如きも亦同じき例であつて、其の思想的根柢に空觀の哲理の存するは言ふ迄もない。而るにこの「一食を以て一切に施す」以下の文の解釋に於いて、大陸諸師はすべて邪正等觀平等施等の理論のみを以てするのである。例へば肇法師は、

「肇曰く、因つて誨ふるに無閡(礙)の施法を以てす。若し能く邪正を等しうし、又能く一食を以つて等心に一切衆生に施し、諸佛賢聖を供養せば、乃ち人の食を食すべし。無閡の施者は、凡そ食を得ば、要ず先ず作意して一切衆生に施し、然る後自ら食す。若し法身を得れば則ち能く實に一切を充足すること、後の一鉢の飯の如し。」(註維摩詰經卷二)(大正大藏經經疏部六—三四九頁上段)

といひ、慧遠法師も亦これを以て凡夫小福、賢聖大福を計せず、偏施なきを說くこと肇法師のそれと大意に於いて大差なきごときはそれである。更に吉藏菩薩の曰く、

「此の第四は其の正食を呵す。若し能く邪正不二を悟らば便ち平等の觀を得。乃ち人の施を食すべし。(中略)一食を以て一切に施し、諸佛及衆賢を供養し、然る後食すべし。上には其の食を受くるは、物(衆生)の福田たることを示し、此には其の食を受くるは復施主たることを敎ふ。既に邪正等觀を得れば便ち是れ無礙無盡法門なり。」(維摩經義疏卷三)(同經疏部六—九三九頁中段)

卽ちこゝにも、善惡邪正の形式的差別を超脫し、凡聖賢愚齊等の施を行ずれば、一行又一切行に通じ無礙無盡の法門を顯開するの意義を說くのは、該相は異つても諸師の解釋に一貫する精神である。然るに太子は單にかゝる敎理的說明を執らせ給ふのではない。卽ちこの經典の言葉を釋したまひて、

「若し能く同じくせんには凡聖泯然として一空なり。空に二なきが故に、一食を以て汝に施すと觀ずる時、卽ち是一切に供養す。若し能く是の如く亡ずる者をば眞に之を正人と言ふべし。汝は則ち凡を抑し聖を揚げて自ら福田と謂ふ。旣に取相を成ぜり。寧ぞ是れ正人ならむ。」

と示したまふのである。聖凡邪正の差別觀念の打破は之を自ら福田ありとなす懺悔反省の自覺なき心情に歸着せしめたまひ、こゝに內的平等の信念を暗示し給ふのである。この御精神は、亦迦葉が自ら勝田の德ありとの計に對し、維摩彈呵の內的動機を釋し給ふ中に更に明らかに顯彰せられるのである。

（註四、空の一相。）
（註五、殺父、殺母、殺阿羅漢、出佛身血、破和合僧の五大罪。）
（註六、苦・集・滅・道の四諦。集すなわちもろもろの諸煩惱・諸業の因によって苦の果生じ、それらを正道に隨って克服するの因によって滅度（さとり）に至る果を得る理法。）
（註七、私がお前の鉢に盛ってやったこの食物を受け取るがよい。）

（註八・九、勝田とは勝れたる福田ということ。福田とは頭陀すなわち乞食することによって施主に福果を與えんとすること。）

「而して淨名呵することは若し能く雙べて邪正を亡じ尊卑を存せずんば、眞に勝田の德ありと謂ひつべし。而して汝は尊卑を存し自ら擧げて人を嫌ひ、則ち分別を成ず。何ぞ勝田と名づけむ。若し分別を以て勝田となさば人みな分別の心あらざることなし。故に勝田の德あらむ。たゞ汝のみにあらざるなり。」

邪正を亡じ尊卑を存せずとは、大陸諸師の言說を以てすれば、卽ちこれ邪正等觀の敎義である。けれども太子は之を「自らあげて他を嫌ふ」心理に歸着したまひ、こゝに共に凡夫たる事實にめざめて、自他融合を實現するとき、はじめて邪正の外的差別の撤せらるべきことを敎へ給ふのである。「人みな分別の心あらざるなし」と人間心理の洞察を示し、こゝに個我中心の迷執に囚はれ易き人間各自の缺陷罪惡を省み給ひ、共に此の迷執ある人間なればこそ、自ら懺悔求道の至誠によつて平等親和の生を實現すべきを宣ふのである。これを憲法第拾條と對照するとき、こゝに邪正に囚はれざる自由の生命が政治生活に於いては公正の原理を具體化し、之を支持する同胞協力の實現を相續すべきことを示したまふのである。

此に維摩經義疏に經典文殊問疾品の「設身に苦有りとも惡趣(十)の衆生を念じて大悲心を起す」

（註十、惡道に同じ。地獄、餓鬼・畜生の三惡道。）

とあるについて、既に羅什法師（註維摩卷五）及び此の釋を繼承せる吉藏菩薩が、

「我功德智慧の身あるも、既に尙苦痛是の如し。況や惡趣の衆生の苦を受くる、無量なるをや。故に悲を起す。」（維摩經義疏卷四）（大正大藏經經疏部六—九五九頁上段）

と云ふ如き平面的解釋を施すに對して、太子が之を

「大士は其の身の苦を忘れて苦を同じうして化することを明かすなり。此の句は悲能く苦を拔くことを明かす。」

と切實の體驗的解釋を下したまひし御精神を偲びまつるのである。大陸諸師の釋は功德智慧の身ある菩薩が迷へる世の衆生に慈悲を起すことをいひ、菩薩一個の向下的敎化を說くに止まるのである。けれども太子は「其の身の苦を忘れて苦を同じうして化す」と仰せられ、この僅かの註にも個我を全體に沒し、蒼生と勞苦を共にする平等の「いつくしみ」を反映せしめ給ふのは、一切人の同じく歸趨すべき大道のうつしき具現を仰ぎまつるのである。全國民の情意を統べをさめ給ふ御心は、大陸諸師の如き個人中心の救濟思想に凝滯せさせ給ふべくもあらぬのである。太子はこの御精神を以て統治の大業を荷はせ給ひ、國家の組織と國政の運用とに國民全體の同胞感を表現して、こゝに氏族制度の積弊に基く当代政治の紛亂に對し、之が改革指導に

盡させ給うたのである。

現實國民生活は其の組織を完成し、秩序を支持せんが爲には、能力・職業等の相違に依つて外に上下貴賤の階次を分つことも、之を否定すべきではない。けれどもこの外的形式に執して差別の世界を內心に融合すべき平等の同胞感を缺くときは、一切の文化的施設もつひに分散と解體との外なきに至るのである。

卽ち國民一致の協力精神に基かざる政治的施設は、すべて生命なき形式に終るのである。眞の國民文化建設は、一切の外的差別を全體協力に融合すべき教育教化を實現し、この道德的基礎に立つて外的文化を統一するとき、始めて成就せらるべきである。太子がこゝに「共に是れ凡夫」と告白して「苦を同じうして」衆生を教化せんことを示し給ひ、內的平等の自覺に立つて同胞協力の生を開導し給ひし御心は、眞に一國文化の內的根柢を養育し給うたのである。我等はこゝに憲法第一條に「和を以て貴しとなす」の教示が、同じく論語に和の貴ぶべきを說いて、

「有子曰、禮の用は和を貴しと爲す。先王の道斯れを美と爲すも、小大之に由れば、行はれざる所あり。和を知つて和せども、禮を以て之を節せざれば亦行はるべからず。」（學而第一）

とあるに對し、

「人皆黨あり、亦達れる者鮮し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ。然れども、上和ぎ下睦びて、事を論ふに諧ひぬるときは、事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。」

と仰せられし内容の相違に想到するのである。

卽ち論語に於いて和の貴しとするのは、禮、換言すれば道德秩序を維持するが爲に内心の和を必要となすのであつて、而も和そのものは禮を以て節せざれば其の意義を全うせずと敎ふるのは、こゝに和の思想は道義生活實現の手段と見らるゝのである。其の禮と和と相互補足の關聯を說くのであるけれども、而もこの二概念を統一する内的根據としての體驗内容は之を十分に說示せられぬのである。それ故に其の思想は何處かに形式的硬化を示すのである。而るに太子の憲法に於いては、和の貴むべきを示させ給ひて、直ちに人皆黨あつて達者少なき人生事實を洞察せさせ給ひ、それ故に自ら凡夫たるを省みて個我執着の弊を打破し、全體協力生活の精神にめざむることに依つて上下和諧して、君父隣里に忠順なるべき生を實現すべしと示し給ふのである。この上下和睦の内的根柢に立つとき、一切の事業は自然に眞實の道理と合一し、國家生活は總ての波瀾と障礙とを打破して開發進展せしめらるべきことを宣ふのである。「上和ぎ下睦びて、事を論ふに諧ひぬるときは、事理自ら通ふ。何事か成らざらむ」とは實にこの確信を顯彰せさせ給ふ御言葉である。論語に說くところの和は何處かに禮なる概念と對立せるに對

し、太子の和が人間心理の洞察に基く團體協力の根本精神に生きしめられてあることは、そこに著しき對照を示すのである。佛儒の學問思想は一たび御心を通ずるとき、こゝに實生活の痛切體驗に融合されて生命化せられるのである。全體協力の生を御心に具現したまひ、國民相和すれば何事か成らざらむと宣ふ、この國民的確信を體現せさせ給ひたればこそ、國家生活の内憂外患の間に處してわが皇政統一と對外的地位の確立は成就せられたれとこそ仰ぎまつるのである。

この内的平等の自覺に徹し、全體協力の信を具現し給ひし御心は、また大乘佛教の教化思想に生命をあたへさせたまうたのである。今この御精神を維摩經文殊問疾品に維摩居士が有疾の菩薩、即ち未だ煩惱結惑を離脱し盡さゞる大乘修行者に對して、「菩薩は客塵煩惱(十)を斷除して大悲を起す。愛見の悲は則ち生死に於て疲厭の心有り。若し能く此を離るれば、疲厭有ること無し。」と說きたる内容に就いて其の意義を示し給ひし御釋を中心に仰ぎまつらうとするのである。（註十一、六根（眼耳鼻舌身意）によって認識せられる六塵（色聲香味觸法）のひき起す煩惱。）

今此の大意は即ち菩薩に愛見の慈悲を離れよと教ふるのであるが、此に愛見の悲とは個我執着の現世的愛情を指し、之に止まるときは教化すべき衆生を善惡好惡に依つて差別して、つひに生死波瀾の人生に在つて平等救濟の理想を實現すること能はざるべきを說くものであ

る。

凡そ釋迦佛陀が無上大覺を成就せられしに拘らず、更に現實五濁の國土に隨順して、衆生救度のために其の生涯を捧げられたる精神は、大乘教徒に「衆生のために道を求む」る菩薩願行の思想を開展せしめ、小乘教徒の隱遁超脱の人世觀を排して、「佛道を得と雖も、涅槃に入らず、大悲代つて苦を受く」といふ沒我的慈悲の教化精神を宣說せしむるに至つたのである。今維摩經に愛見の慈悲を斷除して一切を教化すべしといふのも亦この思想を背景とするのである。けれども斯の如き教化思想は太子に依つて如何なる具體的表現を以て示されしか、之を當代大陸諸師のそれと比較するとき、其の概念的形式に於いては同一の如く見らるべき思想にも、これが內容は重大の相違を示し、此に國家生活の運命を荷ひて同胞教化に御身を捧げ盡させ給ひし內信の證跡は、尙あきらかに窺ひ得るのである。今太子の御釋を引用する前に大陸諸師の釋文を引用して、之を太子のそれと對照しようとするのである。卽ち肇法師の曰く、

「心、外緣に遇へば煩惱橫に起る、故に客塵と名づく。菩薩の法は要ず客塵を除きて大悲を起す。若し愛見いまだ斷ぜざれば則ち煩惱彌滋し。故にまさに之を捨つべし。」(註維摩詰經卷五)

また慧遠法師は之を釋して愛見の悲を斷除して淸淨の法愛を起すに二種の益ありとなし、一には「常化を厭はざるの益」、二には「離縛解他の益」といひ、其の第一を說明するに左の如く

論じてゐる。

「愛見の悲は卽ち生死に於て疲厭の心有りと言ふは、損を擧げて益を顯はす。愛見有るを以て能く諸苦を生ずれば、厭うて滅を求む。故に生死に於て疲厭の心有り。又愛見を以て怨親を分別すれば、廣く化すること能はず。故に疲厭の心有り。若し能く此を離るれば、疲厭の心有ること無し。益の損に異るを彰はす。」（維摩義記巻三）（大正大藏經經疏部六―四七五頁上段）

更に吉藏菩薩の釋は次の如くである。

「愛見の悲は則ち生死に於て疲厭の心有り。若し能く此を離るれば、疲厭有ること無し。在々の所生、愛見の覆ふ所と爲らず。夫れ所見有れば必ず滯る所有り。所愛有れば必ず憎む所有り。此れ有極の道。いづくんぞ能く無極の用を致さん。」（維摩經義疏巻四）（同經疏部六―九五七頁下段）

以上大陸諸師の解釋內容を論ずれば、肇法師は菩薩の法は煩惱を斷じて慈悲を起すに在りとなし、個人中心の現世的愛情は煩惱を增大するが故に捨離すべしと說くに止まり、經典の一般的說明の外に何ものもない。慧遠の釋は肇法師のそれと比ぶれば之を敎化的見地に解する點に於いて徹底せる內容を示してをる。卽ち愛見の慈悲は煩惱の因となつて諸々の苦惱を生じ、ために生死動亂の人生に疲厭せしめ、又怨親愛憎の差別に迷惑せしむるを以て、ひろく衆生敎化の妙用を起すに障礙あることをいふのである。吉藏師の所說も亦その主意に於いて之と大差な

い。これまことに大乘佛教の通説であつて、龍樹菩薩が智度論（七九）に菩薩は「悲空二法」を成就すべきことを論じて、

「菩薩亦是の如し。二道あり。一は悲、二は空。悲心に衆生を憐愍（れんみん）し、誓願して度せんと欲す。空心にして來れば則ち憐愍の心を滅す。若したゞ憐愍の心のみ有りて智慧（空心）無くば則ち心衆生無くして衆生有る顚倒中に沒在す。若したゞ空心のみ有りて、憐愍して衆生を度せんの心を捨てば則ち斷滅中に墮つ。是の故に、佛二事を說いて兼ね用ふ。一切空を觀ずといへどもしかも衆生を捨てず。衆生を憐愍すといへども一切空を捨てず。」

といひ、群生を化益する慈悲心が、一切人世の事象に執着することなき空心と一致するとき、始めて私なき淨心を以て衆生濟度を成就し得べきを說ける如きも、亦以上と同じ思想內容を示すものである。

然るに太子は此の愛見の慈悲を否定する經典の說示に對し、唯かくの如き菩薩の個人人格と一切衆生との外的關係のみを以て釋したまふのではない。更に之を同信協力生活の情意に徹到せしめて次の如く釋させ給ふのである。

（但し、維摩經文殊問疾品に愛見の慈を捨離すべきことを明かすのは、有疾の菩薩に對して其の心を調伏するの方法を說く文中、自他の上に執著すべからざるを勸めて、そこに之を說くのである。次に引用する太子の御文は、執著を離るべきことを勸むる所以に就いて其の大意を釋し給ふところである。こゝに愛見の慈を離るべき理由に對する太子の御見

地は綜合されてあると共に又大陸諸師の何れに於いても、かくの如き微妙の御釋は見出すこと能はざるを以て、特にこれを引用する次第である。）

「自行外化を憶して以て心を調伏すと雖も、若し自他の二境を存して修行せば、則ち修する所廣からずして、物とその苦樂を同じうすること能はず。所以に勤めて應に著を離るべしと明かすなり。」

此の御言葉は又愛見の慈を論じて「此の愛見の悲は善なりと雖も、猶是れ相を存し、自他の二境を平等にして廣く衆生を化すること能はず」（維摩經義疏文殊問疾品）とのたまひし御言葉と照應せらるべきである。今太子の御釋はその概念形式に於いては必ずしも大陸諸師のそれと逕庭なきが如くである。而も御表現の微妙の内容は又自ら概念的理解の領域を超出して、切實の信念體驗を暗示せさせ給ふのである。

太子は同じく個我執著の弊を示し給ふのであるけれども、その御表現は決して大陸諸師のそれの如き單なる救濟意志を内容とするものではない。自行化他の理想に進むといへども、そこに個人中心の觀念を存し、自他融合の情意を缺くとき、個我を全體生活に捧ぐる眞實の實行は生れざるべきことを宣ふのである。

太子は「自他の二境を平等にして」と融合親和の生を念じ給ひ、「修する所廣かる」べきを

のたまひて、わが生に同心協力の信を具現すべきことを教へ給ふのである。こゝに群生とその苦樂を同じうせむと蒼生の痛苦を自らのそれとなし、永久苦闘に隨順し給ひし御體驗を示す御言葉は、衆生生活の核心に徹する廣大のいつくしみを表現せさせ給ふのである。それは高きに立つ聖者の向下慈悲ではない。「共に是れ凡夫」とのたまひし懺悔求道の至誠を偲ばしむる內的平等の同胞感である。大陸諸師は同じく個我執着の現世的愛情を超越し、眞實の法愛に基く平等教化を說くけれども、そこに反映されたるものは上求佛道の向上的志願に進むと共に、下化蒼生の大悲救濟に向下する大乘菩薩の個人人格である。迷へる衆生と教化する聖者との懸隔對照がそこに現はるゝのである。卽ち大覺に到らんとする個人人格が同時に下つて一切衆生に向はんとするのである。そこに豫想さるゝものは、個人中心の教化思想であり、また向下的啓蒙的教化活動である。太子の示しましゝ如き、同じく人たるにめざめて苦樂を分つところの團體的信念に基く教育精神の表現はそこに見出すことは出來ぬのである。勿論大陸諸師に於いても一切衆生と對立懸隔なき平等教化の思想は之を力說しないのではない。而も彼等は之を說くに自己を全體生活に沒入して盡すところの體驗を以てするのではなく、菩薩個人に於ける執著なき慈悲と教化活動との理論的關係を論ずるに止まるのである。

故に蒼生とその勞苦を共にする如き一切群生の情意に徹する融合の信念は披瀝せられぬので

ある。太子の御心に湛へられしものは常に現實具體的の團體國民生活であつた。教育教化は個人、又其の協力に依つて行はるべきものであるけれども、その個人は常に全體生活の歸趨すべき眞實の道に徹入し、身を融合協力の至誠に沒して、現實國民生活を内に支ふる指導者であらねばならぬのである。大陸諸師の菩薩教化の思想は一切衆生のためを意圖しながらも、なほ高きに立つ指導的人格を豫想して、個人的であり同時にまた抽象的である。具體的國民生活の協力精神を養育する如き生命は遂に示されてはをらぬのである。故に大乘教化思想といへども尚理想的世界の追求に止まつて、特殊教團生活の冥想觀念裡に構成せられたる概念理論たるを免れざるに至るのである。

太子の精神は大乘佛教の理想に生命をあたへさせ給うたのである。

こゝに維摩經佛國品に大乘菩薩の教化を嘆じて「衆の法寶を集むること海の導師の如し」とある言葉に對し、肇法師は之を

「衆生を引導して、大乘海に入り、法寶を採取して、必ず難無きを獲しむること、猶、海師の善く商人を導いて、必ず夜光を獲しむるがごとし。」（註維摩詰經卷一）（大正大藏經經疏部六―三三〇頁上段）

と釋し、また慧遠法師は、

「衆の法寶を集むること、海の導師の如し、とは、攝他方便なり。法は珍寶の如く門別一に

あらざれば、衆の法寶と名づけ、人を導いて趣き求むれば、法寶を集むと名づく。海の導師の如し、とは、喩へて以て之を顯はす。海中の導師は人を導いて寶を採る。菩薩是の如し。人を導いて法を求むるが故に、取つて喩と爲すなり。」（維摩經義記巻一）（同經疏部六―四三〇頁上段）

と解するのであるけれども、太子がこれを

「衆の法寶を集むること海の導師の如しとは群生を開導して共に法海に入り、勸めて善を修せしめ、終に功德智慧の寶を得ることを明かす。卽ち義、導師の諸の商人を將ゐて共に大海に入り、善く寶を採る方法を敎へ、多く利を得しむるに同じ。」

とのたまひし御心を偲びまつるのである。肇法師の釋は單に衆生を引導して大乘海に入る菩薩外化を說明するのみである。慧遠法師は衆生敎化に依つて又能く法寶を得ることを明かし、上求佛道・下化蒼生の相關を以て敎理的解釋を施すのである。而るに太子は之を特に「群生を開導して共に法海に入り」と示させ給ひ、又再び「義、導師の諸の商人を將ゐて共に寶海に入り」と、「共に」てふ御言葉をくりかへし給ひ、群生と共なる大信海を憶念せさせ給ふ切實の御心を反映せしめ給ふのである。大陸諸師の菩薩は常に向下的態度を以て敎化する個人人格である。太子のそれは常に蒼生と共なる生を體現し、其の信に立つて團體協力生活を化導する敎育的人格である。

平等教化の眞精神は我が國民生活の運命を荷はせ給ひし御心によつてこそ眞に具現せられたるを仰ぎまつるのである。

大陸大乘教徒が其の願求し來りし上求佛道・下化蒼生は實に人間生活の普遍理想である。此の理想觀念を生命化して現實精神たらしめ給ひし御心は我が日本の人道的使命を表現あらせられたのである。今かゝる思ひに以上引用し來りし幾多の御言葉を綜合して再びこの思想について考察しまつらんとするのである。凡そ上求佛道の大願は眞に罪惡不實の我に徹してはじめて切實の希求となるのである。到達するところなき無限生成の人生にはこの煩惱罪濁の凡夫こそ人間の僞らざる姿である。このまことの姿に徹するとき、我らは同じく苦惱濁亂の人生を共に生活する凡夫たることにめざむるのである。此に高きに立つ教化救濟の如きはつひに實現すべからざる、又同時に眞實の道にあらざることが信知せらるべきである。大陸諸師の描きし如き煩惱結惑を斷じ衆生救濟に向下する大乘菩薩の如きは、現實的には抽象せられ又假定せられたる理想人格である。この理想に內容を與ふるものは、人世の核心に徹する偉大希有の精神であらねばならぬのである。こゝに「共にこれ凡夫」と仰せられて人生の濁惡を自らの內心に窮め、「世間虛假唯佛是眞」とのらして常に眞實大悲の佛意を念じたまひ、このくもりなき誠に蒼生の勞苦を荷ひて「群生とその苦樂を同じうせん」と告白したまひし廣大仁慈の御心に依つ

てこそ、この理想は實内容を與へられたのである。御心のうちには常に一切群生海が憶念せられてあるのである。勝鬘經義疏（攝受正法章）に、攝受正法の菩薩が大地の四重擔（大海・諸山・草木・衆生）を持するが如く、一切衆生も荷負するを明かす文を釋する中、大海について、

「大海とは菩薩に比す。言ふこゝろは廣く衆生を抱くこと大海の抱納無窮なるが如し。故に以て比と爲す。」

とのたまふ御言葉をこゝに參照すべきである。抱納無窮の大海の如き御心に生きとし生けるものの心がをさめられ又養育されるのである。この全體生活を念はせ給ふ御心には、懺悔反省の求道心は常に衆生敎化の大悲心と唯一の信念に融合するのである。上求佛道・下化蒼生の大願は此に抽象的假定的の理想ではなく、自ら現生の悲痛にめざむる心に、同じき痛苦の世を生くる他の情意に徹入し、共に眞實生命の信を以て協力せんとする敎化活動となり、體驗事實に合致するのである。こゝに大陸大乘敎徒の個人中心の高蹈的救濟思想を轉じて團體同信生活の敎育精神に淨化したまひ、抽象理想主義の敎化思想に現實的內容をあたへて、東亞億兆の宗敎的願求を生命あらしめ給ふのである。そこに實現さるべき敎化は個人人格を基本とする向下的啓蒙的のそれではない、全體精神を個人生活に體得し、同信協力の生を擴充する同朋生活開展の實現である。導く者と導かるゝ者との心は此に唯一の信に融合するのである。かくて貴賤賢愚

の差別ある實人生を内的平等の同朋感に總攝淨化する教育教化が實現するのである。これまことに平和と友情とを養育する一切道德活動の源泉である。こゝに國民生活は歴史伝統と能力とに基く生活形式の相違を認めつゝ、之を同朋協力に融一する平等感激は生れ、獨立國家の團體精神は無窮に進展して世界人道的使命の實現に向ふのである。太子の御心は實に世界に出づべき日本民族生活そのものを表現せさせ給うたのである。此に勝鬘經義疏に大小乘の内的區別を論じて、

「仍ほ大小を辨ぜば、自ら度せんことを求めず、物を濟ふを先と爲して佛果に等流するを稱して大乘と爲し、物を化することを患と爲し、但自ら度せんことを求めて、彼の無實を臧するを、名づけて小乘と曰ふ。」（一乘章）

と示したまひ、個人的超脱を追求して他を顧みざる人世觀を小乘として排したまひ、他を救ふを先となし、永久生命の信を共にするを大乘として示させ給ひたる御精神を憶念しまつるのである。この大乘宗教は實に一切群生海を御心にをさめたまひ、人生の悲痛にめざめて群生と苦樂を共にせんと誓はせたまひたる信念體驗に依つて、われらが苦惱の生を照す人生宗教とし、國民協力を養育する國民教化の原理として開示せられたることを信知するのである。

「世間虛假唯佛是眞」とは太子自ら宣らせ給ひしところである。御夫人橘大郎女はこの御言葉を以て太子をその薨後に記念しまつられたのである。太子が我が國未曾有の轉機に於いて國民文化の根柢を確立し給ひし其の事業は、雄大なる改革指導の精神に基かねば成就せられざりしところである。當代氏族制度の積弊と對照するのみに於いても、憲法拾七條の啓示は正にこの御精神を顯彰して餘りあるのである。而も世間虛假と示して罪刦の人生を自らの足らはぬ姿に窮め、唯、佛の眞實を念じ給ひし御心は常に人生永遠の未完成を信知して、自ら國と民とのために無窮の求道努力を相續し給うたのである。此に維摩經菩薩行品に「少欲知足にして世法を捨てず。」とある語を釋して、

「世法を捨てず。とは、言ふこゝろは己れ能くすと雖も、然も世に違して自ら異なること莫れとなり。外の論(註七)に言遜ひ行を危くすと云ふはこの謂なり。」

(註七、佛典を內典といふに對して中國の典籍を外典といふ。ここは論語を意味している。)

と示されたる御言葉に我等はこの御心に基きし太子一代の行化を偲びまつるのである。これ慧遠が

「少欲知足にして自行染を離れ、世を捨てずして有に隨ひて物を益す。」（維摩義記巻四本）

と解し、又吉藏菩薩が、

「行ひは少欲知足にして世法をば捨てず。威儀を壞せずして能く俗に隨ひ、道儀を壞せずして能く俗に隨ふ。俯仰天下、皆我同じと謂ふも、我獨り人に異なるなり。」（維摩經義疏巻六）

と論ずる如く、其言葉の一般的意義に於いては、菩薩は解脱を得と雖も尚世間に同じく教化妙用を現すべきことを說くものである。けれども太子の御釋は唯此の如き概念的教義を示させ給うたのではない。己れ能くすと雖も常に他と共なる生を念じ、同じく人たる事實にめざめて內的平等の信に徹し、その行ひの上にこの信念を顯はせよとをしへ給ふのである。現實世間生活に隨順すと雖も、自らを高きに置く心在るときは、それは尚世法を捨つることゝなるべきを暗示し給ふのである。こゝに論語の「言遜ひ行を危くす」の語を引用したまひ、內に深痛の誠を抱くが故に外に簡素の姿を示し、濁惡人間生活の不斷改革に盡しつゝも他を責めずして人と相和し、外に意志する改革的念願を我が內心の懺悔求道に具現して之を自らの行ひを以て示すべきをのらせ給ふのである。偉大なる改革指導の御精神は、眞に人生の未完成に徹し、外なる業績に滿足せさせ給はずして、濁惡の世を統ぶる眞實の生命を自らに體得すべき希求を相續し給ひ、之を一代行化に具現して、この心の全體國民生活に通はむことを念じ給うたのである。こ

れまことに世間虚假の懺悔求道心に自らを沒し、くもりなき大悲の永久生命を仰いで、一切を「唯佛是眞」に歸攝し給ひし嚴肅悲痛の信仰に基かせ給ふのである。日本文化創業の大任は、この外的功業に安住し給はず、目に見えぬ「まこと」を念じて獻身勞苦したまひたる御心の威嚴に依つてこそ、一切の波瀾と障礙とを打破して、之を成就せられたのである。太子は、この信を照明し濁惡の生を護念し給う三世永遠の教主として釋迦牟尼佛を仰がせ給うたのである。

「世間虚假唯佛是眞」とは太子が時に自ら御夫人にのらしましゝところであつて、又家庭の御生活に王子王女にもこの信を教へたまひしを偲びまつるのである。第一王子山背大兄王が推古天皇崩御後、幾度か皇位繼承問題の渦中に立たせ給ひ、王の嗣位を阻止し奉れる蘇我氏がつひに軍兵を以て王を襲ひまつりし時、「一身の故を以て豈萬民を勞せむや」「夫れ身を捨てゝ國を固くせむは亦丈夫者ならざらむ歟」とのたまひて、御一族悉く共に自刃して神あがりましし上宮王家滅亡の悲劇は、その國民生活を荷はせ給ひ、唯佛是眞の見えざる誠に御心を捧げましゝ父聖王の御心の正しき示現であつたのである。此に勝鬘經義疏（序説）に印度の波斯匿王が其の女勝鬘に大乘の信を勸めんとして、勝鬘の道器勝れたることをたゝへて、「勝鬘は是れ我

が女なり。聰慧利根、通敏にして悟り易し。」とある文に對して、

「是れ我が女とは讃重の辭なり。言ふこゝろは、子を相ること父母に過ぐるはなく、臣を知ること君王に如くはなし。我が子の稱は自他を別たず、唯善に在り。今勝鬘は既に己が子たり。且明德ありて應に勝道を聞くべきが故に、亦自ら我が子と稱するなり。」

と釋したまひし御言葉を仰いで、更にこの家庭的薫化の御精神を偲びまつるのである。

子の心を洞察するは親に過ぐるなく、臣の意を照知するは君王に如くことなかるべきである。波斯匿王が其の女勝鬘の聰慧利根なるを見て大乘の道に開導せんとするも、亦よく其の子の心を知るが故にと宣ふのである。而も「我が子の稱は自他を別たず、唯善に在り」眞實の信を行ふ道は唯肉身父子の間にのみ止まるべきではない。自他を別たず親子の情を以て敎へあひ、又まもりあふべきを宣ふのである。されば現生家庭の生活も個人的肉身の情愛にのみ安んぜず、私なき眞實の大道を具現して共に公に奉ずべきことを示したまふのである。太子はこのみ心に、王が「勝鬘是我之女」と言ひし言葉をよませ給ひ、「勝鬘は既に己が子たり」とその父子の親緣を思はせ給ひつゝ、而も「且つ明德ありて應に勝道を聞くべきが故に亦自ら我が子と稱するなり」と示して、そが敎への道の親子たりし事實を回想して、こゝに家庭生活の眞義を窮めさせ給うたのである。

この勝鬘經の「勝鬘是我之女」の言葉に對する御釋は、之を吉藏菩薩が其の著勝鬘經寶窟の中に解いて、

「是我之女とは、子を知るは父に若くはなし、故に我之女と云ふ。又父の慈愛の重きを顯はして、道法を以て之を利せんと欲す。故に是我之女と云ふ。又我は其の肉身を生めるを以て、復佛をして其の慧命を發せしめんと欲す。故に是我之女と云う。」（大正大藏經經疏部五―一〇頁下段）

とあるに比べて更にこの御釋に如何に太子の御心の反映せしめられたるかを偲びまつるのである。吉藏師が單に「是我之女とは子を知るは父に若くはなし」と言へるに對して、太子が之と共に「臣を知ること君王に如くはなし」と宣ひ、更に父子君臣の情誼を照應せしめ給ふのは、またこの御製疏が攝政の太子としての人生觀に國民を指導すべき信念を表現したまひし希有の文獻であることを思ひまつるのである。されば吉藏師が父母の慈愛の重きことを顯はすと說いて、其の慧命を發せしめんとする父の宗教的愛護を語るけれども、これなほ個人父子の問題であるに對し、太子は「我が子の稱は自他を別たず、唯善に在り」と宣らせ給ひ、自他を分たぬ全體生活にまことの道を實現して、親子家庭の情意を國家公共の生に開發せしむべき綜合的教育精神を示させ給ふのは、そこに著しき對照を見るのである。大陸釋家の註疏が多く個人的信仰の領域に止住せるに對し、常に國家全體精神を御心に具現して、大陸傳來の經典を生命化

したまふ内容は此に申し盡すべくもあらぬのである。太子御製疏の開示するところのものは、すべて「天下の道理」であり、國民全體生活の内的進路である。「我が子の稱は自他を別たず、唯善に在り」「諸々の惡をなすことなく、諸々の善を奉行せよ」とは太子が第一王子山背大兄王に殘させ給ひし最後の御言葉である。王は之を以て王家一族の永誡としたまひ、「身を捨てて國を固うし」萬民をいつくしむ信と行ひとに、この惡を厭ひ善を願ふ「まこと」を示し給うたのである。現生家庭の芳緣にくもりなき永久生命の信を具現したまひ、個人肉親の恩愛に國家生活憶念の至誠を貫かせ給うたのである。これまことに世の虛假なるにめざめて、唯佛の「まこと」を念じ給ひつゝ、國と民とのために、一代の勞苦をさゝげましゝ偉大悲壯の生命のうつしき眞證である。大聖釋尊は人間愛欲のきづなを斷つて、一切現世の諸惡を解脱し、そこに涅槃の一道を體現されたのであつた。けれども太子はこの解脱の精神を家庭と國家との生きたる現實に純化したまひ、恩愛思慕の人生を捨てさせたまはずして、そこに永遠の信を、又沒我奉公の至心を實現せさせ給うたのである。記紀萬葉の歌にあらはれしわが祖先の人生愛と、み國のために死を念ずる吾が武士道的精神は、こゝに人生宗教の信念のうちに綜合具現されたのである。勝鬘經義疏に、經典攝受正法章に菩薩が衆生教化の精神を示して「不請の友と作り（中略）世の法母と爲る。」とあるを釋して、

「友は是れ相救ふを義となす。然れども請ひて後に救ふは眞の友に非ず。故に不請の友と作ると云ふ。菩薩の物を化するは慈母の嬰兒に就くが如し。故に世の法母となると云ふ。」

と宣ひ、國民教化の念願を開示して民のため不請の友とならむ、大悲の法母とならむと誓はせ給ひ、あまねき「いつくしみ」を以て同胞協力の生を養育し給ひし御心は、この事實を偲びまつることに依りて更に切實に我らが胸に仰がしめらるゝのである。これ卽ち佛の「まこと」を以て御一族共に家庭的情意を國民の上にそゝがせ給ひ、み國のためにみいのちを捧げさせ給ひし嚴肅悲痛の體驗事實を內容とするのである。

自らのために解脫を求めず、永遠に衆生救濟に勞苦する大乘菩薩の宗教は、この偉大なる人格の捨身の大業に依つてこそ、眞に生きたる人生宗教として日本國土に興隆せしめられたのである。

太子は既に維摩經義疏（佛國品）に菩薩が天魔外道を伏制するの意義を論じて次の如く仰せられてゐる。

「菩薩は故に威を現じて伏せんと欲することなし。たゞ魔はこれ邪見の主なり。今大士の廣道を見れば自然に耻を懷く。故に義を以て伏制と云ふ。（中略）此の句は下化蒼生を明かす。亦即ち上の不請の友を帖して、上の外惡干さゞることを廣むるなり。」

惡魔外道に向ひても、但之を勢力を以て伏するのではなく、くもりなき「まこと」に蒼生と苦樂を共にしつゝ、不請の友となつて常に其の教化に盡し、この廣道の實現に依つて自然に彼が惡逆の心意をも薫化する、これまことの教育精神なることを示したまふのである。されば大乘道の信念と實行との一致を具現せる菩薩が遍ねき慈悲の教化を行ふ時、國家生活は內に信念の根柢ある道德活動を實現し、外に一切の惡魔剛敵にも侵されざるべきを示し給ひ、內的信念の威力に現實政治の生命を求めさせ給ふのである。太子は實にかくの如き御精神を以て日本文化創業の大任を成就し給うたのである。國民が共に永遠の大道を體得し、天魔波旬をも動かしぬべき誠といつくしみとに融合して、一切衆生に通ふべき眞實の信を實現するとき、此に國家生活は團體協力に守られ、世界人道の使命を發揚して、一切外敵外惡と雖も　侵すこと能はじと宣ふのである。これまことに明治天皇が

折にふれて

おのづから仇のこゝろも靡くまで誠の道をふめや國民（三八年）

仁

いつくしみあまねかりせばもろこしの野にふす虎もなつかざらめや（四三年）

教育

いかならむときにあふとも人はみな誠の道をふめとをしへよ（三九年）

道

人の世のたゞしき道をひらかなむ虎のすむてふのべのはてまで（四五年）

鏡

世の中の人のかゞみとなる人のおほくいでなむわが日の本に（四三年）

と宣らせ給ひし大御心に通ひますのである。世界人道の理想を生命化する我が皇室の御精神を此にうつしく仰ぎまつると共に、また東西文化統一の大業は常にこの廣大博綜の御精神により て啓導せられたるを憶念するのである。

かくて個我を全體に沒し、惡魔をも薫化すべき眞實の信を共にする大乘の流通は、之を「世城の王道よく通ずるに同じ」と宣ひ、又同じ維摩經義疏（佛國品）には三寶紹隆は王道流通とも

仰せられ、こゝに平等の慈を以て一切群生海を濟ふべき眞實の宗教教化は、これ　日本天皇の大御心に外ならぬことを反映せしめ、大乘流通の根柢を我が皇室の教化精神に置かせ給ふのである。これ正しく世界宗教の教化理想を固有神道の內的意義に融合して、我が日本の世界的使命を宣揚し給うたのである。日本書紀に、神武天皇が六年の東征を終へさせ給ひて、大和橿原の地に皇都を恢廓せしめたまはんとして大詔を下し給ひ、その中に、

「夫れ大人の制を立つ、義必ず時に隨ふ。苟くも民に利有らば、何ぞ聖造に妨はむ。且た當に山林を披拂ひ、宮室を經營りて、恭みて寶位に臨み、以て元元を鎭むべし。上は則ち乾靈の國を授けたまふ德に答へ、下は則ち皇孫正を養ひたまふ心を弘めむ。然して後に六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇と爲むこと、亦可からずや。」

とのたまひきと傳ふる我が日本の史的精神は、卽ち　天皇は「みおや」の神のくもりなき大御心に基きて國民を治らせたまひ、政治は卽ち神を祀り給ふみ心によりて、こゝに「神ながらのみち」は現實の政治と、又國民の內心とを統ぶる大道として、祭政一致の精神は、つねに世界文化の理想を攝取して開展せしむべき生命をつたへ弘め來つたのである。太子の御精神はこの我が皇室本來の大御心を世界的文化の上に發現し給うたのである。推古天皇十五年、かしこくも神祇崇拜の大詔を下させ給ひ、

「朕聞かくは、曩者わが皇祖の天皇等の世を宰めたまふに、天に跼まり地に蹐して敦く神祇を禮ひたまひ、周く山川を祠りて幽に乾坤に通はしたまへり。この以に陰陽開和ひ造化共に調ひき。今朕が世に當りて神祇を祭祀ることあに怠あらめや。」（推古天皇紀）

と仰せられ、太子、群卿百寮を率ゐて神祇を祭拜せさせ給ひたるも、また憲法第拾二條に「國に二君なく、民に兩主なし。率土の兆民王を以て主となす」と宣ひし御言葉と表裏して、國民文化の重大轉機に「位東宮に居りて、萬機を總攝し天皇の事を行ふ。」（用明天皇紀）としるされし聖德太子の御心のいかにあらせられしかを偲びまつるべきである。これまた太子薨去前一年、親ら嶋大臣と議して「天皇記及び國記、臣連、伴造、國造、百八十部併せて公民等の本記を錄す」といふ國史撰述の大業を殘させ給ひたる事實と照應せらるべきである。太子の御精神は常に建國の古を憶念して、神代の昔より無窮開展に連る國民生活のために大御身を捧げ盡させ給ひ、この根本信念に立つて一切の外來文化を統攝したまうたのである。されば天魔波旬をも靡かしぬべき眞實慈悲の大道を宣布して之を「王道流通」と仰せられ、十方三世に悖るなき我が皇道を具現して一切衆生生活を養育化導せさせ給うたのである。

これまことに　明治天皇の大御歌に

をりにふれて

開くべき道はひらきてかみつ代の國のすがたを忘れざらなむ（四五年）

述　懷

千早ぶる神のかためしわが國を民と共にも守らざらめや（三六年）

道

千早ぶる神のひらきし道をまたひらくは人のちからなりけり（三六年）

神　祇

いつはらぬ神のこゝろをうつせみの世の人みなにうつしてしがな（四四年）

寄　國　祝

かしの實のひとつ心に萬民まもるがうれし蘆原のくに（三七年）

橿原の宮のおきてにもとづきてわが日本の國をたもたむ（同）

國

天つ神定めたまひし國なればわが國ながらたふとかりけり（四四年）

世はいかに開けゆくともいにしへの國のおきてはたがへざらなむ（同）

と示させ給ひし大御心に通はせ給ふのである。

聖德太子がひろく大陸の思想・文化を總攝せさせたまひ、之を國家生活の體驗に統一して、

日本の人道的使命を發現したまひし大業は、まことに、「開くべき道をひらきて」而も古の國の姿を忘れ給はざりし御心を仰ぎまつるのである。世界的日本の創開せられんとするあらた代に建國の古を憶念して國史を光闡し、神祇を敬ひたまひ、皇室の下萬民一體の國家的生命を發現して、「群生と其の苦樂を同じうす」と宣ひ、和合協力の敎化精神を中外に弘宣し給ひし御精神は正しく「乾靈(あまつかみ)の國を授けましゝ德に答へん」とつたへられし橿原の宮のおきてに依りて、國民を治らし給うたのである。これまことに「世はいかに開けゆくともいにしへの國のおきてはたがへざらなむ」と示し給ひ、又「虎のすむてふのべのはて」までも人の世の正しき道を開けよと宣ひし　明治天皇の大御心に連らせ給ふのである。廣く外國の文明が攝取せられるとも、民族共同の祖先に對する信仰が其の中を貫通し、國民協力の統一的生命を開展して、一切を此の綜合的信念に融化する國民的威力は、聖德太子の御精神に於いて世界的日本の曙光(しよ)として輝き出でしめられ、畏くも　明治天皇の大御稜威(みいつ)に依つて、現世界文化の上に發現せられたのである。

こゝに維摩經義疏に於いて自ら特殊の國民生活と普遍の宗敎理想との關聯について之を開示したまひし御言葉を仰ぎまつらうとするのである。

卽ち經典佛國品の中に「衆生之類是菩薩佛土。」とある佛語に對する御釋である。蓋し原典の意は佛菩薩は既に一切事象に執著なきを以て、本來己が所有としての國土はない。けれども、衆生の所在に隨つて己が土となし、之を敎化して到らざることなしといふのである。今太子はこれを次の如く示させ給ふのである。

「衆生之類是菩薩佛土。とは、夫れ國土を論ずれば淨穢の殊ありと雖も、此は是れ皆衆生の善惡に由りて感を爲す。故に衆生に於いて必ず定んで己が國と稱するの義あり。若し至聖を論ずれば、卽ち智、眞如の理に冥して、永く名相の域を絕し、彼なく此なく、取なく捨なく、既に太虛を以て體となし、萬法を照すを心と爲す。何ぞ名相として量すべきことあらむ。寧ぞ復定めて己が國と稱せむや。而して大悲息むことなく、機に隨ひて化を施す。則ち衆生の在る所至らずといふ所なし。故に衆生の類是れ菩薩佛土と云ふなり。」

太子は、今、至聖の心境を啓示して、宇宙人生の大道を窮めたる智は眞如の理に冥合し、永く名相の域を超出して絕對の信を體し、彼此を離れ取捨を絕せる無礙の心德を成就せることを宣ふのである。こゝに「彼なく此なく」とは、又自ら「彼此俱に亡ずれば山として入るべきなく、世として避くべきなし」（維摩經義疏弟子品）と宣ひし如き御言葉に其の意義を窮むべきである。一切差別の迷執を絕して、「山」卽ち現實を離れたる隱遁生活に宗敎を求むるものでもな

く、又「世」即ち實世間活動を捨てて永遠の信を具現するものでもない。「彼なく此なく」の意は正にかゝる内容と照應せらるべきである。又「取なく捨なく」とは法華義疏に「聖の義の是れ實にして取るべきなく、亦世事の是れ虚にして捨つべきなく」（如來壽量品）とも宣らせ給へば「取なく」とは「聖の義」即ち宗教的眞理の概念形相を以て取るべきなく、又「世事」即ち世間生活の之を虚妄として捨つべきもない。道を實生活の外に求めず、現實世間の體驗に眞實の信が生くる時、即ち現世と彼岸との對立は滅して、取捨の觀念に拘泥せざる自由の生命が開展するのである。即ち理想と現實と、靈性と感覺と、一切を渾融して全人生の歸趨を示すは至聖の心境であると宣ふのである。こゝに「太虚を以て體となし」とある、大空のごとくさやりなき圓融無礙の生命を體とし、「萬法を照すを心となす」といふ、宇宙の一切に永久生命の暗示を徹照し、天地人生の無極を内心に實現するのである。これ即ちくもりなき解脱の誠に一切蒼生の心をすべをさめ、之を哀愍開化すべき至德を成就せる至聖の心境を示すのである。何れの世、何れの國土も、この精神は煩惱濁惡の生に求めらるべき永遠の光明であり、人類普遍の精神理想である。されば至聖の心境には「何ぞ定めて己が國と稱せんや」個人我を中心として國土を己が所有とする如き觀念はない。而も迷へる世の衆生を念じては「大悲息むことなく」其の個性に隨ひ、環境に應じて、永久に教化の大用に盡すのである。されば衆生の在る所、人天の善

惡、國土の淨穢に拘らず、その救濟を全うするもの、これまことに至聖の精神であることを開示したまふのである。

けれども現實の衆生はその國土に淨穢の差別は存するのである。これ皆「衆生の善惡に由りて感をなす」、卽ち修善の衆生は淨土に在り、濁惡の衆生は穢土にあるのである。國土の美惡は其の人々の內心と實修との齎(もたら)すところである。而もその何れにするも、「衆生は必ず定んで己が國と稱するの義あり」卽ち全人類といひ、一切衆生といふも、それは抽象空虛の概念であつて、現實地上の生は必ず定んで歸すべき鄕土があることを宣ふのである。太子は現實人生の具體事實に於いて國家國民生活の嚴存するを照したまひ、この具體生活の歷史と體驗とに基きて、至聖が一切に遍(あまね)き眞實大悲の敎化を實現したまひ、世界的宗敎理想を現實國土の生活に生きしめ給うたのである。常に一切衆生生活に通ふべき眞實の信を具現して、「太虛を以て體となし萬法を照すを心となす」といふ全人生を照す至心を念じたまひつゝ、この大空のごとき御心に地上の區劃を省(かへり)みさせ給ひ、特殊の國家生活の體驗に普遍の宗敎理想を融化し給ひたる御精神は、今これらの御言葉にうつしく仰ぎまつるところである。その個我執著の弊を正し、求道的至誠に國民協力を開導して、永遠の信を現實生活に發現したまひし一代の敎化は、正しくこれ「彼なく此なく、取なく捨なく」と示されたる、現實と理想の對立を超絕する綜合的生

命を體現したまひし御心に基くのである。

一切衆生を對象とする世界宗教の教化理想は、こゝに始めてその生命化さるべき現實的基礎をあたへられたのである。

こゝに太子が憲法第三條に我が國體の大義を闡明(せんめい)して

「詔(みことのり)を承りては必ず謹め。君をば則ち天とし、臣をば則ち地とす。天覆ひ地載せて、四時順行し、萬氣通ふことを得。地、天を覆はむと欲するときは則ち壞(やぶ)ることを致さむのみ。是を以て君言(のたま)ふときは臣承り、上行へば下靡く。故に詔を承りては必ず愼(つつし)め。謹(つつし)まずんば自ら敗れむ。」

と示したまひし御言葉を仰ぎまつるのである。即ち皇室を核心とする家族的國家に在つては、君臣の分は天覆ひ、地載せて四時順行し萬氣通ふが如きを仰せられ、この歴史的自然の眞實生命に隨順する大道は、皇統無窮の信の下に、國民の平等協力を實現することに在るを宣ひ、之に反する一切は即ち「自ら敗る」べき大道の違逆となるべきを弘宣し給ふのである。これは管子が君臣の分を説いて、

「群臣を制して生殺を擅(ほしいまま)にするは主の分なり。令を縣(か)け制を仰ぐは臣の分なり。威勢尊顯は

主の分なり。卑賤畏敬は臣の分なり。令行禁止は主の分なり。奉法聽從は臣の分なり。故に君臣相與に高下處を異にするは天と地との如し。其の分畫の同じからざるは白と黑との如し。故に君臣の間明かに別たるれば、則ち主尊く臣卑し。此の如くなれば則ち下の上に從ふは響の聲に應ずるが如く、臣の主に法るは影の形に隨ふが如し。故に上令し下應へ、主行ひて臣從ふ。以て令すれば則ち行はれ、以て禁ずれば則ち止み、以て求むれば則ち得。此れ之を易治と謂ふ。」（明法解第六十七）

とあるを參考したまひしものと云ひ、之を比較せらるゝのである。而も管子が單に天地の懸隔を以て君臣の分を示し、特に君主の尊顯と臣民の卑賤とを對照せしめ、相對的階級觀に基く「上令して下應ふ」の外的秩序を論ずるのは、權力的支配の政治思想を示す外に、何等上下を融合すべき國家全體生命は示されぬのである。けれども太子は君臣天地の對照を示すに中庸の「天覆ひ地載せて」の語を攝取したまひ、地の天を載するが如く仰ぎ、天の地を覆ふが如くいつくしまれ、其の高下と秩序とは、之を「天覆ひ地載せて、四時順行し萬氣通ふことを得」と自然融合の合一的生命に歸着せしめ給うたのである。これまことに、管子等に現はれたる支那國民生活の權力國家思想に對し、我が家族的國家の內的威嚴のうつしき表現を見まつるのである。天壤無窮の國民的信念は、この天地對照の渾一、君臣上下の融合に光闡せられ、こゝに

「天津日嗣は天つちのむたとことはに榮えまさむ」（日本書紀）

「天つちのむたとことはに仕へまつらむ」（古事記）

「明つ御神の大八島國を天つちつきひとともに安らけく平らけく知ろしめさむ」（出雲國造神賀詞）

とあらはされし現實地上の悠久を貫くべき國家生命は、世界に出づべき日本文化創業の時代に正しく聖德太子の御心によつて宣示せられたのである。

こゝに柿本人麿が日並皇子をいたみまつりて、

ひさかたの天見る如く仰ぎみし皇子の御門の荒れまく惜しも

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隱らく惜しも

とよみ、又同じきとき舍人らが

高光るわが日の皇子の萬代に國知らさまし島の宮はも

天地と共に終へむと念ひつゝ仕へまつりしこゝろたがひぬ

とうたひたる如き、無限の天を仰ぎみるこゝろをその仕へまつりし皇子の上に憶ひまつりて、こゝに現實地上の生に無窮のいのちをめざめしめ、現生奉仕の悲喜の情意に天地宇宙の莊嚴にして親和なる姿を生きしめたる人のこゝろに想ひ到るのである。この自然と人生とを渾融す

る精神が國家悠久の生命のうちに表現せられたるこれらの歌は、また太子の數々の御言葉をも偲ばしむるのである。こゝに太子が維摩經義疏に於いて、經典菩薩品中、維摩が善德長者に如來と乞人（こつにん）とに平等の財施をすゝめたる文の御釋に、

「何となれば則ち如來は既に是れ敬すべきの最、乞人は是れ愛すべきの極、尊卑異なりと雖も、福を生ずること異ならず。」

とのたまひ、又

「若（もし）施主、等心に一の最下乞人に施すこと、猶如來福田の相分別する所無きが如し。とは、下を擧げて上に等しからしめて平等を明かす。言ふこゝろは、乞人を愛するは佛の上の敬心の重きことに等し。等二于大悲一不レ求二果報一。とは、上を擧げて下に齊しからしめて平等を明かす。言ふこゝろは佛を敬ふは乞人の上の悲心の重きに等しとなり。」

と示させ給ひ、上を敬ふ心を下をいつくしむ心に徹したまひ、敬すべきの極たる佛を仰ぐことは、又愛すべきの最たる乞人をかなしむ心とひとし、とのたまひし御言葉を憶念するのである。これ佛の上の敬心の重きにその乞人の上の悲心の重きを等しからしめ給ふのである。上を敬ふの心は同時に下を慈しむの心と一なることを示し給ふのである。「慈レ下敬レ上天之大義也。」（維摩經義疏菩薩行品）と宣ひし御言葉も此に對照せらるべきである。これまた「天覆ひ地載せて四

時順行し萬氣通ふことを得。」と示されたる天地の和を「上和ぎ下睦びて、事を論らふに諧ひぬるときは、事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。」と宣ひし人生の和に渾融する上下融一の綜合的人生觀を仰がしむるのである。上、天皇に仕へさせたまひて、下、國民の勞苦を荷はしましゝ御心は、常に皇室無窮の憶念のうちに全國民の上に連らしめられ、苦惱悲痛の人生事實を洞察して生きとし生けるものの心ををさめたまうたのである。國家永久生命のため盡しましゝ御心のうちに全國民の心は生きしめられ、この博大綜合の御精神は、君と臣と、天と地と、如來と衆生と、親と子と、其の自然の秩序と對照の融合とを貫く無限生命を唯一の御身に體現せられたのである。

聖德太子はこの御心を以て大陸文化批判綜合の大業のうちに、國民永遠の歸趨の大道を開闡し給うたのである。新しき國民生活はこの綜合的人格に精神原理を求めてこそ、國民は永久生命の信を內に體し、國家生活は無窮の進展を成就すべしと信ずるのである。

東亞億兆の宗教心を代表する大乘佛教を國民生活の體驗に統一して、世界的宗教理想に現實的內容を充たしめ給ひし太子の御精神は、我が日本の文化史的使命を表現あらせられたのである。われらはこの御精神の現はれ出づべき源を辿つて再び古事記の歌謠と神話とに示されし神

神祖先の情意に遡り、御心と等しく通ふ國民精神の開展を萬葉歌人の歌に見んとするのである。

凡そ我が國に於いては民族共通の祖神に對する信仰が常に團體生活の統一的生命として貫通し、祖神の正統にまします皇室を宗家として、同一血脈に連る同一國語民族が、世界に比類なき家族的國家を形成し來つたのである。故に國家統治は個人能力に基く英雄の支配を原則とするのではなく、全國民生活の歴史的生命を具現せさせ給ふところの皇統を仰いで、こゝに全體生活が等しく融合せしめらるべき傳統威力を傳へ來つたのである。

されば我が民族の神話に於いては皇祖の大神は應報の道理を司り給ふ神格でもなく、又天地創造の宇宙神にいますのでもない。皇祖を始めまつり多くの神々は畏怖的崇敬の對象ではなく、とこしへに子孫を護り照しみちびき給ふところの祖神として、親しく仰がれ且つ祈られたのである。又高天原は天上の世界ではあるが、それは觀念の淨土ではなく、大みおやの神のましますの民族の鄕土として、そこにはこの國土と同じき人生の動亂も現はされてをる。

皇祖の大神は事ある毎に高木の神に祈らせ給ひ、八百萬の神々を率ゐまして、敎化と政治との一切を統べをさめ、高天原を治らし給うたのである。大神が天岩戸にかくれ給ひては、「爾ち高天原皆暗く葦原中國悉に闇し。此に因りて常夜往く。是に萬づの神の聲は狹蠅なす皆わ

き、萬づの妖悉に發りき」（古事記上巻）といひ、唯一の大神を失ひては天地宇宙も忽ちに暗く、また一切のわざはひは悉く起りしことを傳へてをる。こゝに八百萬の神々は天の安の河原に神つどひつどひて大神を迎へまつるべき手だてを盡したまひ、つひに大神を岩戸より出しまつりては「高天原も葦原の中つ國も自ら照り明りき」といふのである。卽ち八百萬の神々は遍へに大神の御稜威に依らせられ、また天地宇宙もこの大神の光照を蒙りてのみ榮え得ることをあらはすのである。それは單なる太陽神に對する崇拜ではない。日本書紀の一書には大神が月夜見尊と晝夜を分治したまふことを書いてあるけれども、其の太陽神としての自然神話は極めて稀薄である。書紀にも、

「伊弉諾尊、伊弉冊尊共に議りて曰く、　吾れ已に大八洲國及び山川草木を生めり、何ぞ天下の主たる者を生まざらむやと。是に共に日の神を生みます。大日靈貴と號す（一書曰。天照大神。一書曰。天照大日靈尊。）此の子光華明彩、六合の内に照り徹らせり。」（神代巻上）

とあるのもまた古事記の内容と共に、日神と申し奉るも大みおやの神の太陽の如くましゝ大御德をたゝへまつりたる國民的信仰の表現であることを思はしむるのである。大神は五穀を見そなはしては「是の物は則ちうつしき蒼生の食ひて活くべきものなり」と喜びまして農桑の道を開かせ給ひ、又事毎に八百萬の神々をつどへて、その一つごころをすべをさめて、まつりごと

の道を行はせ給ひしを傳へられてをる。この神々のつどひは國家重大の事件を決するとき、諸氏の首長が集つて皇室を輔翼せる古代の習俗を反映するものがあるけれども、又古事記全體の表現には常に大神の大御心と神々の御心とが融一して、まつりごとのすべてを行はせたまひし相狀を彷彿せしむるのである。

大神が天孫瓊瓊杵尊に

「葦原の千五百秋の瑞穗の國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就いて治せ。行矣。寶祚の隆えまさんこと、まさに天壤と窮無かるべし。」（神代巻下）

と宣ひて、尊を葦原の中つ國に天降らしめ給ふときに隨ひまつれる神々は、卽ち大神に奉仕せし神々であつた。こゝに神々の子孫は永へに大神の御正統にまします皇室に奉仕して、皇祖の大神を仰ぎまつることは卽ち天皇に仕へまつることであり、又天皇に仕へまつるところに親しく大神の大御心の具現を仰ぐことを得たのである。

この統一的信仰ある國民は先着民族たる出雲族又韓土との交通に依つて歸化せるところの他種族をも融合して、此に我が國家生活を形成し來つたのである。神武天皇の橿原の宮の御詔勅に、「上は則ち乾靈の國を授けましゝ　德に答へ、下は則ち皇孫の正しきを養ひましゝ心を弘めん」とのらせ給ひきとしるされ、天皇はつねにくもりなき皇祖の御心によりて國民の心ををさ

め給ひ、ここに現實の政治の基くところを示させ給ひたるを傳ふるのは、この史的精神を顯はすものである。「大君は神にしませば」とうたひし國民の心と照應する君臣一體の全一的精神は、文化の開展に伴ふ學問宗教、また施設事業の複雜化を統御して、つねに團體的融合を實現すべき力を建國と共につたへ來つたのである。

我らの祖先の描きし神々英雄はすべて隱遁超脱の聖者ではなく、動亂の生に隨順せし情意的人格である。速須佐之男命は「よさしたまへる國を治らさずして」妣の國根之堅州國に罷らんとおもふが故に「青山を枯山なす泣き枯らし、海河は悉に泣き乾しき」といふ悲劇的運命を荷はせ給ふ荒神にましましたのであるが、又出雲の肥の河上に八俣遠呂智を退治して乙女を救はせ給ひ、現實の地上に降り立たして出雲八重垣の歌に家庭の歡喜と愛情をうたはせ給うたのである。神武天皇の久米の御歌に「みつ〳〵し久米の子らが」とうたはしゝ同胞愛とまた「うちてしやまむ」といふ征服の雄たけびは、又御兄君五瀨命が登美毘古が矢に當り給ひて「賤奴が手を負ひてやいのちすぎなむ」とをたけびて神あがりましぬる御最期と共に動亂の生のかなしき緊張を示すものである。倭建命の御生涯が英雄的人格の悲壯の運命をつたへることはいふまでもないが、「さねさしさがむの小野に」の御歌をのこして命に代りて海に入りましゝ后弟橘比賣命の御最期、又命が神あがりまして后たちみ子たちがもろもろ下り來たまひ、その地の

那豆岐田にはらばひもとほりて哭泣し給ひつゝ「なづきの　田の稻幹に　稻幹に　這ひもとほろふ　ところづら」とうたはせたまひ、又命のみたまが白鳥となつて飛びいますのを追ひては小竹の苅杙に御足切り破れども痛きを忘れて哭く〳〵追ひ出でましきといふ悲壯の物語は、また仲哀天皇が熊曾の國をうち給はんとして筑紫の訶志比宮にいまし神明の怒にふれて崩御したまはんとせし時「やゝその御琴をとりて、なま〳〵に彈きましけるに、いくだもあらずて、御琴のねきこえずなりぬ。かれ火をあげて見まつれば、はや崩りましにき」といふ如き表現と共に生死問題の冥想の餘裕もなき急迫緊張の生命を示すのである。古事記に現はるゝ我が民族の生は外なる戰と內なる睦びの錯綜する明暗の交代である。太子が「國家の事業を煩となす」と現生の悲哀に徹したまひ、而も之を同じく群生に察して大悲息むなしと告白したまひ、同胞憶念の永久苦鬪に隨順して、其の切實體驗に大陸の學說教義を生命化したまひし綜合的御精神は、この民族生活の劇的生命を辿つてはじめて理解し得るのである。概念理論に內容をあたへ、抽象教義を生命化せるものは常に現實人生の波瀾に生くる若き民族の情意であつた。

わが祖先の內生活の表現はこの生々無息の開展力とまた內心に徹する情熱の緊張を湛へたのである。記紀萬葉の幾多の戀愛歌にもその姿は示されてゐる。本居宣長が正確に論じたるが如く、（玉勝間第十の卷）支那詩人の詩に自らの戀なく、之を君臣父子の間に譬へ現す如きうはべを

飾る理智的作品の多きに對し、我が祖先のあるが儘の悲喜の表現は切實の情緒に永久の節奏を波うたすのである。古事記（下巻）黒日賣の　仁德天皇にさゝげまつりたる、

倭べにしふきあげて雲ばなれ離き居りとも我忘れめや

大和べに往くは誰がつま隱水の下よ延へつゝ往くは誰がつま

という別離の哀情を示す御歌、また天皇の御弟速總別の王が天皇のめでましし女鳥の王を愛して、天皇の御軍に追はれたまひ、梯立の倉椅山にのがれて、

梯立の倉椅山を嶮しみと岩掻きかねて我手とらすも

また

梯立の倉椅山はさがしけど妹と登ればさがしくもあらず

とうたはしし深痛の愛情に現生の苦難を忘るゝかなしきいのちの表現は、また　允恭天皇が井の傍の櫻をみそなはして衣通姫を偲ばせたまひ、

花ぐはし櫻の愛でこと愛でば既くは愛でずわが愛づる子ら

とうたはせ給ひ、又衣通姫が河内國の茅渟宮に天皇を慕はせましては、

常へに君もあへやもいさなとり海の濱藻の寄るとき〳〵を（允恭天皇紀）

とうたはしましごとき、自然にそゝぐみ心と人間の愛の切實と、その渾融を示す精微の情緒

は、また短き現實の生の愛情にとこしへのいのちを偲ばしむる御歌と共に、すべて痛切の情意にみつる生の力を表現するのである。我が國は此の人間内心に徹入する抒情詩的精神を全國民が體驗し、古事記、萬葉の如きは、特殊の天才的作者の個人的創作ではなく、其のうたは全國民に個々の作者を有し、それが一貫せる心理的脈絡に連るのはわが民族の藝術的天禀を示すものである。萬葉集（巻廿）防人のうたひし歌、

津の國の海の渚に船よそひ發出も時に母が目もがも　（丈部足人）

わが門の五津株柳いつもいつも母が戀すな産業ましつつも　（矢作部眞長）

國々の社の神に幣まつり贖祈すなむ妹がかなしさ　（忍海部五百麿）

天地のいづれの神を祈らばかうつくし母にまたことゝはむ　（大伴部麻與佐）

わが妹子がしぬびにせよとつけし紐糸になるともわはとかじとよ　（朝倉益人）

彼等は專門の歌人ではなかつた。けれどもその生活は悲喜動亂のあるがまゝの現實に沒し、切實の哀情と歡喜を共にせし情意生活の彈力は、すなほにて、雄々しき言葉の節奏に傳はるのである。山上憶良が「惑情を反さしむる歌」（萬葉集巻五）に、自ら異俗先生と稱する者に對し、

「父母を　見れば尊し　妻子見れば　めぐしうつくし　世の中は　かくぞことわり」といひ、

「天へゆかば　汝がまにまに　地ならば　大王います　この照らす　日月の下は　天雲の　向

伏すきはみ　谷蟆の　さ渡るきはみ　きこしをす　國のまほらぞ　かにかくに　ほしきまにまに　しかにはあらじか」とうたひし心も、こゝにわが民族精神の表現たりしことを偲ばしむるのである。大地を離れし冥想と論理を排し、地ならば大君いますとわれらが生を統べをさむるみ國の心をうたひ、また父母を尊み、妻子をめぐむ現生の情意をのべてゐる。我が祖先はその征戰の軍歌にみるごとき雄渾の意力、また祓の思想の示すごとき罪垢はつねに拂はるべきものとし、それが國家的儀式ともなつて祝詞のごとき莊重雄大の表現をも生じ、清淨と簡素を貴ぶ能動的精神をたゝへてゐるのであるが、それは同時に悲劇的生命の表現の心情の機微に徹する詩的精神を伴ひ、こゝに文武と明暗と、それらを融合する現實的綜合精神を育くんだのであつた。殊に全國民が同一國語と血族的結合を有し、團體的情意を長養すべき本來の素質をば存したのである。

此の日本民族の精神が世界文化の潮流に接し、いかに開展するかは正しく民族永遠の運命に關する問題であつた。これを解決せられたものは實に聖德太子の信仰思想と大業に外ならぬのである。當代大陸の思想學術を究明せさせ給ふといへども、常に空虛の抽象理論と個人的理想の形式を排し、み國を治らしましゝ御心は生ある者の思ひををさめ給ひ、邪正の外的差別の打破を說きたる大陸佛敎の空觀の哲理を、共にこれ凡夫と同じき生の融合の信に生命化し給ひ、

無我の教義を内的化して團體精神の體驗を示し、又大乘教徒の理想なる大乘菩薩の向下的教化を群生と其の苦樂を共にする内的平等の同胞精神に純化し給ひし如きその數々の御表現に、國民生活の痛苦を御心に荷ひて外來文化を批判綜合し、東方日本に世界文化を統一すべき根柢を確立したまひし雄大悲痛の御精神を示したまふのは、常に地上の現實を愛し、波瀾と轉化の生を戰ひ來りし神々祖先の生命の威力を開發したまひし御心を顯はすのである。維摩經（方便品）に居士が大德を讃し、「心大いなること海の如し」とあるを大陸諸師が何れも其の心境の廣大をいふとなせるに對し、「萬機に達して遍照せざることなしと明かす」とある如きも、人生の大海に心をそゝぎて群生の情意に徹入し、大悲の勞苦をささぐる生を暗示せさせ給ふ如きの御表現は又以上に仰ぎ來りし御心と照して、こゝに現實の悲喜を共にし、切實の愛情と憶念のまことをうたひし記紀萬葉の祖先の生の綜合表現者にましましゝ御心の影を偲ばしむるのである。片岡山の御うた、また御臨終にして愛妃をいたましましゝ御うたの如き、一つに連るいのちは日本的情意を示すかなしき御いのちの御表現である。太子は世界に出づべき日本民族の表現者として永遠にわれらが上にのぞみましますのである。

太子の信仰思想は三經義疏また拾七條憲法に仰ぎ得るけれども、直接やまと言葉の親しさを以て大御心を偲ばしむるものは、日本書紀（推古天皇紀）に傳へられたる片岡山の御歌である。書紀には、「二十一年冬十二月庚午の朔の日、皇太子、片岡山に遊行しき。時に飢ゑたる者道の垂に臥せり。仍りて姓名を問ひたまへども言さず。皇太子、視て飲食を與へたまひ、すなはち衣裳を脱ぎて飢ゑたる者に覆ひて言りたまひしく、『安らかに臥せ』と宣りて、歌よみした

まひしく、」として、

しなてる　片岡山に　飯に飢て　こやせる　その旅人　あはれ　親なしに　なれなりけめや

さすたけの　君はやなき　飯に飢て　こやせる　その旅人　あはれ

と一首の御歌をあぐるのである。太子の御歌は法王帝説に太子薨去の御時近く、先立ちて神あがりましゝ愛妃をいたませ給ひて詠みましゝ御歌と僅か二首を留むるのみである。けれども何れも現世の悲哀をよませたまひし抒情詩であることに三經義疏・拾七條憲法と脈絡する大御心のうつしき表現を見まつるのである。推古天皇二十一年十二月太子は片岡山にいでまし、道の邊に飢ゑたる者の臥すのをみそなはしてあはれみましたのである。その御歌の形式は素朴であると共に御言葉の高きしらべは痛切の大御心の直ちに我等の胸に迫るをおぼゆるのである。「しなてる　片岡山に　飯に飢て　こやせる　その旅人　あはれ」とみそなはしましゝまゝの痛感を直敍せさせ給ひ、「親なしに　なれなりけめや」と人の運命と心理を洞察して再び「その旅人　あはれ」とくりかへし給ふ前後の同じ御言葉の大いなる繰返しは、内にこもります大御心の切實なるがために息をもつがせ給はずして、一首を限りなき節奏の波動に渾融せしめ給ふのである。あはれみます大御心に飢人のかなしき運命は生きしめられ、御歌は個人的特異性を止めぬほどに全人格的痛感が悲痛の洞察をつくして、こゝに我は他に沒し、他はまた我に生きて

人生の大海に無限安慰の光明をめぐませ給ふのである。「群生とその苦樂を同じうす」（維摩經義疏文殊問疾品）とのたまひし大御心のうつしきあらはれを仰ぎまつるのである。

無常なるが故に解脱を求むべしといふ宗教教義の理智的形骸はこゝに止めぬのである。はかなき無常の人生にこの痛切のいつくしみこそ悠久無限のいのちをわれらが胸にそゝがせ給ふのである。この形は單純にして、ふかきみ心のこもりたる御言葉の姿は、憲法又三經義疏の御言葉の内容と直ちに連るのである。けれどもこれらに就いては改めて次の機會に述ぶることにして、今はこの御歌に現はれし如き人生觀を又三經義疏の上に仰ぎて、再び日本精神の光輝を外來文化の上にあらはしたまひし御精神を顯彰せんとするのである。はじめに維摩經文殊問疾品の「以己之疾愍於彼疾。」とある言葉の註釋に於いて太子の人生觀の反映を仰がんとするのである。但吉藏菩薩の釋は羅什・道生・肇三師と多く其の異同を見ざるが故に、吉藏師の解を次に擧げて太子のそれと對照しまつらうとするのである。

「次に以己之疾愍於彼疾。（中略）其れ己を推して物を悲せしむるなり。我いま微に病む。苦痛なほ爾り。況んや惡趣の群生の無量の苦を受くるをや。又我に智慧あるに、なほ疾苦あり、況んや達らざる者をや。己を推して彼を愍むこと、是れ大士兼濟の懷ひなり。」（維摩經義疏卷四）（大正大藏經經疏部六―九五八頁上段）

太子はこれを次の如く示したまふのである。

「應に爲に己を以て人にたくらべよ。今我が輕苦すら尙ほ爾なり。況んや三塗の重苦をやと。則ち懃に化を施せと說くべしとなり。外論に云く、能く近く譬を取るは仁の方なりと謂ひつべしと。」

太子がこゝに特に論語（雍也第六）の言葉を引用したまひ、能く近く譬を取るは仁の方なりの語に自らの御思想を示させたまふのは、ふかきみ心のこもらせ給ふところと仰ぎまつるのである。大陸諸師が「推己愍彼。是大士兼濟之懷故。」と唯、一般教學的解釋に止まれるのに比ぶれば、太子がこの註釋に於いても單に教義的解明に終らせ給はずして更にこの經語に基いて人生普遍の心理法則を徹鑒したまひ、こゝにわが直接體驗の事實に照して人の上を念ふべきを宣ふのは其の形式は僅かの相異の如くなれども、之が內容に於いては著しき對照を見しむるのである。わが心を人の心にそゝぎ、人の心をわが心に見る、これ人生いつくしみの基くところなるを示しましますのである。片岡山の飢人をみそなはして「親なしに　汝なりけめや」とうたはせたまひし人間苦惱の運命に對する洞察の依つて來るべき人生觀內容は此に顯示せられるのである。國民の上を念はせ給ふ無限の大御心は、常に大乘佛典を人間內心の洞察に生命化したまひ、平等大悲の敎化理想に具體的內容をあたへさせ給ふのである。無常動亂の人生を共に戰ひ

生くべき生命は、この大御心によつてこそ開發せしめらるゝのである。されば法華義疏（巻四）に、經典安樂行品に菩薩の親近處を說くの最初、「常好二坐禪一。在二於閑處一。修二攝其心一。」とあるに對し、既に光宅大師がこれを經典本來の說相に隨つて初親近處に入ると釋するに拘らず、太子はこれを不親近處に入ると示したまひ

「此の中の文を釋するに、本義は上の長行に配して重を作りて解釋す。而れども私の意は少しく安んぜざるが故に但直ちに頌して重を作らざるなり。但し顚倒分別より以下二行の偈は、上に常好二坐禪一といへるを頌す。初の一句は、禪を好むの由を明かし、次の一句は正しく上に常好二坐禪一といへるを頌す。言ふこゝろは顚倒分別の心あるに由るが故に、此を捨て彼の山間に就きて常に坐禪を好むなり。然れば即ち何の暇ありてか此の經を世間に弘通せむ。故に知んぬ、常に坐禪を好むは猶ほ應に不親近の境に入るべきことを。」

と仰せられたる所も、又以上の內容と照應して之を考察せらるべきである。即ち安樂行品に菩薩の親近處及び不親近處を明かせる長行と、其內容を再說せる偈頌との關聯に就いて、光宅大師が之を一々長行に配當して其の內容に形式的整齊をあたへ、これが文意の論理的說明を構成せんとするに對し、太子は常に佛陀の全教旨を憶念して、其の眞趣に洞徹すべきことを暗示し給ひ、こゝに「私の意は少しく安んぜざるが故に、但直ちに頌して重を作らざるなり」と仰せ

らるゝのである。單獨語義の論理的關係の分析もこれを其の全一的精神に統攝して理解すべきことを示させ給うたのである。

これらの例證は三經義疏の到る處に之を見出し得るのである。例へば法華經五百弟子受記品に下根人が世尊の一乘道開示の教化を領解し、自ら所懷を述べて佛恩深重を憶念して有名なる衣の珠の譬喩を以て之を現す文中、「有レ人至二親友家一。醉レ酒而臥。」とある言葉に對し、太子は「若し親友の家に至りて酒に醉ふと言はゞ、是れ則ち親友酒を與へて醉はしむるなり」と示し給ひ、此の譬喩の內的意義に於いても、聖人は煩惱の緣と作るべきに非ざる所以をのたまひ、つひに「但此の文は少しく倒せり。應に人あり酒に醉ひて親友の家に至りて臥すと言ふべし」と經語の訂正を論じ給ふ如き（日本大藏經法華部章疏一―一七一頁下段）亦此の一例を見るのであつて、共にその心意を護り合はすべき友情の誠を思はせ給ひ、又之に例同して自ら行ひ他を教化すべき聖人は衆生のため煩惱の緣とならざるべきを明かし、此に人生歸趨の大道を具現し給ふ大御心は經典の表現法に嚴肅精到の內的批判を示させ給ふのである。大乘佛典の思想內容を窮盡し給ふにも之が說相の外的形式に依らせ給はずして、常に分析的理解を綜合的信念に攝取し給ひ、局部的凝滯を排し給ふ圓融無礙の生命は、また「大悲息むことなし」と宣らせ給ひ、國家の組織と秩序とを生命化して融合協力の信を體現し給ひし大御心と一つなることを信知するの

である。

但し「常好坐禪」を菩薩の初親近處に入れることは、吉藏菩薩も之を法華義疏（卷十）に示し（大正大藏經經疏部二―五九六頁中段）又天台大師も法華文句（卷九、上）（同經經疏部二―一二〇頁上段）に之を肯定せる如き、すべて經典本來の說相に基くものとして、決して、誤れる解釋ではないのである。けれども太子は此にこの「常に」なる言葉に大御心を留めさせ給うたのである。常に坐禪を好むといへば、個人的解脫の修養のみに終始する日常生活を表現するが故に、この生死超脫の理想を一我の天地に局分する偏倚的人生觀に陷ることを敎誡し給ふのである。太子はこの信念に依つて此の語を偈頌中の「顚倒分別、諸法有無、是實非實、是生非生、」等とある言葉に配釋し給ひ、「顚倒分別の心あるが故に、彼の山間に就きて常に坐禪を好むなり」と示し、こゝに個人超脫の人生觀は全人生のひとしく歸趨すべき大道にあらざるを明かし、「然れば何の暇ありてか此の經を世間に弘通せむ」と國民敎化に對する深甚の御念願を示す强き御言葉のしらべは、まことにこれ瞬時の凝滯もあらせぬ內心の脈搏を傳へるのであつて、常に蒼生の上を念じて暇なき苦鬪の生涯を貫かせ給へる一代の御精神は、これらの大御言葉に自ら反映すると共に、この經典註疏に於ける精微の洞察批判も亦この內的威力に基くことを偲ばしむるのである。片岡山の御歌に無常人生の苦惱に失せし民をいたませ給ひし御言葉のつよきしらべも亦

こゝに思ひ合はすべきである。この大御心は常に現實の國土を愛し、無限の願求と努力に苦闘せられたる神々祖先の情意に通ひ、又やまとの國の心をその行ひと言葉に示しゝ幾多の國民のまごころに連らせ給ふのである。我等はかく思念してこれらの御表現はまた太子薨去後近き時代に出現しゝ國民詩人柿本人麿の歌と對照せらるべきを思ふのである。人麿がその幾多の作歌を殘せし持統・文武の兩朝は、既に大化の改新を了し、壬申の亂を經、過渡期の動搖裡に律令制定、中央集權の確立を成就し、推古朝以降急激なる大陸文化輸入の刺戟に依る國民文化の發展は、政治・學問・造形藝術等の一切に亙り、軈て天平の盛時を現出せんとした新興の時代である。其の深痛の感情と强靭の意力を有する詩人が此の御代に仕へて國民的生命の威力ある表現を殘しゝも亦自然である。人麿の歌に人生の無常と悲痛をうたひしものゝ多きことは、人生の核心に徹する詩人の眞情を示すものである。その無常の詠嘆の如きも彼に在つては決して隱遁的情趣の表現ではなかつたのである。それは動亂の生の苦痛に堪へて强かりしその內心の證跡を傳ふるのである。人麿が「妻死せし後泣血哀慟して作れる歌二首並びに短歌」（萬葉集卷二）の中第一首の長歌に愛妻の死を聞きて悲しみに堪へざる思ひを敍し、之が後半に

わが戀ふる　千重の一重も　慰むる　情もありやと　吾妹子が　止まず出で見し　輕の市に　わが立ち聞けば　玉襷　畝火の山に　喧く鳥の　音も聞えず　玉桙の　道行く人も

一人だに　似てし行かねば　すべをなみ　妹が名喚びて　袖ぞ振りつる

と詠み、又第二首の反歌に

こぞ見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる

衾道を引手の山に妹を置きて山路をゆけば生けりともなし

とうたふ如きは卽ちこれを顯すのである。死せる愛人を憶ひて盡きざる情緒は、故人が止まず出で見し輕の市に立ちてなほ在りし日の如く偲ばんとするのである。畝傍の山に喧く鳥の聲も聞えず、相似し人だにもゆかぬ寂寞の天地に、なほその日の如く妹が名をよびて袖振りし一瞬の情意を歌うて居る。又、冴えわたる秋の月影に共に見し夜を偲ぶ時にも、その表現は單に過去の追憶の敍述ではない。「相見し妹はいや年さかる」と結びし言葉の響きは、永久に解決することなき人生事實の痛感が、限りなき悲哀を催さしむるのである。安易の理智的解決に向はずして、無常の生そのものゝ體驗に故人を偲ぶ切實の情緒を托してをる。こゝに亡き人を今によみがへらしむる如き情意の彈力が、却つて歲月の懸隔を內心に渾融せんとするのである。殊に彼が仕へまつりし皇子、皇女の薨逝を悼み奉りたる長歌または短歌は、雄渾の直觀的態度を持せし彼の生の威嚴を偲ばしむるのである。その「高市皇子尊の城の上の殯宮の時、柿本朝臣人麿の作れる歌一首並びに短歌」（萬葉集卷二）とある中の長歌の終を

然れども　わがおほきみの　萬代（よろづよ）と　思ほしめして　作らしゝ　香具山の宮　萬代に　過ぎむと思へや　天のごと　ふりさけ見つゝ　玉襷　かけて偲ばむ　かしこかれども

と結びし如き、現前の皇子は神去り給へども、皇子が萬代を念ひて作らせ給ひし香具山の宮居は、千よろづの代に過ぎざらむと歌ひて、憶念の情意に過去は現實によみがへらしめられ、現實は過去に連つて、無常の生の痛感の極致になほ内心不滅の力を感じ、人間運命の羈絆（きはん）をも脱せんとするのである。かくて彼が奉仕の忠誠はその詩人的情熱の裡に無窮の史的生命を示すのである。これらはまた太子の御歌に於ける無常人生の詠嘆が蒼生と共なる世を念じ給ふつよき御いのちを反映し、又三經義疏の數々の御言葉が國民生活を荷はせ給ふ永久苦闘の信念を表現する内容と照應して共に現實地上の人生を愛し、動亂痛苦を回避せずして人間不可抗の運命に堪へつゝ戰ひ來りたる日本精神の威力を顯すのである。太子が勝鬘經義疏（攝受正法章）に攝受正法の菩薩は三分（身・命・財）を捨つることを明かせる經文に對して、次の如き解釋を示させ給ひたるも、又正しく以上の如き精神を表現したまふものと仰ぎまつるのである。

（但し攝受正法とは太子によれば「能く萬行を修するの心を攝受となし所修の行、理に當つて邪に非ざる故に正と言ひ、物の軌則となるが故に法と言ふ。」と示されて居る。故に攝受正法の菩薩とは一切德行の源泉たるべき全一的信念を體現し、その實行は正眞の道にかなひ直ちに一切衆生の指導原理を示すごとき人格をいふのである。即ち攝受正法とは此の「人」によつて體得せられたる全人生を開覺すべき指導原理の全一的内容を指すのである）

「捨身より以下は別して身を捨つることを明かし、捨命より以下は命を捨つることを明かし、捨財より以下は財を捨つることを明かす。舊き人の釋すらく、捨身とは自ら放に奴と爲るを謂ひ、捨命とは人の爲に死を取るなりと。今云く、捨命と捨身とは皆是れ死なり、但意を建つること異なるのみ。若し身を餓虎に投ずるが如きは本身を捨つるに在り、若し義士危を見て命を授くるは、意命を捨つるに在りと。捨財とは、謂く身外の物なり。後際と等しくとは未來を謂ふ。未來は卽ち無際なり、謂く常に捨つと云ふこと明らかなり。又曰く、金剛心を後際となすと。老病死を離るとは、分段生死を謂ふなり。此に得と言ふは、謂く衆生を。して得しむるなり。功德の法財は世財の五家に共に有るが如くにはあらず。一切衆生の殊勝の供養を得とは、語は少しく倒せり。應に殊勝の一切衆生を供養することを得と言ふべし。

或は文に順じて直ちに釋さば、人天殊勝の供養を得るなり。」

凡そ經典に攝受正法の菩薩は煩惱の身・命・財を捨て、常住の身・命・財を得べきことを說くのは卽ち生死を解脫して永久生命を體得することを示すのである。太子は其の文に對し、新舊諸解を選擇して註釋し給ひ、捨身と捨命と、其の意を建つることは異れども、同じくこれ道のため衆生のために死を念ずる求道、敎化の精神に外ならぬことを開示せられ、更に「後際と等しく」の語を釋して「後際と等しくとは、未來を謂ふ。未來は則ち無際なり、謂く常に捨つと

云ふこと明らかなり」と明かし、日常生活の獻身的勞苦に捨身の眞義を窮めさせ給ひ、經典に「得無邊常住不可思議功德通達一切深甚佛法。」とあつて、此の菩薩が己身に無邊、常住、不可思議の功德を得るの義を說けるに對し、特に大御心に基きて之を「得とは卽ち衆生をして得しむるなり」と轉釋し給ふのである。凡そこの諸功德を得るを菩薩己身に就いていふことは經典本來の說相であつて、之を一切衆生をして得しむと釋する如きは、勝鬘經に關する新舊諸說を博綜せる吉藏師の寶窟にもみぬ所である。（大正大藏經經疏部五―三七頁中段）これまことに生死解脫の體得を群生と共にと願はせ給ひたる廣大仁慈の御精神を顯彰するのである。こゝに經典にこの菩薩が聽て「一切衆生の殊勝の供養を得」ることを示して、印度大乘經家が煩惱の身・命・財を捨つることを說きつゝも、尚個人中心の理想となつて、之を一切衆生の供養を己身に得んことに歸着せるに對し、太子は「この語少しく倒せり。應に殊勝の一切衆生を供養することを得といふべし」とその經語の訂正を示させ給ひ、捨身・捨命・捨財の眞義を徹到して、之を自らに供養を期せずして、「應に殊勝の一切衆生を供養することを得」んことに歸嚮し給ふのである。人生究竟の價値を一切の外的效果に求めさせ給はぬ偉大の御精神は、大乘佛典といへども尙其の何處かに存する個人的超脫の思想を批判し給ひ、常住の身・命・財を得んといふ生死解脫の觀念を、安易の完成と個人の理想に終らしめ給はずして、國と民とのため御身をさ

さげて永劫息むなき求道努力を意志し給ひたる切實の信念體驗に生命化し給ふのである。この御思想はまた憲法第九條に、

「信は是れ義の本なり、事毎に信あるべし。其れ善惡成敗要らず信に在り。群臣共に信あらば何事か成らざらむ。群臣信なきときは萬事悉く敗る。」(本編末尾に註)

と仰せられたる內容と對照せらるべきである。此に義とは道德的法則を指し、其の本づくところは內心の信にあることを宣ふのである。此の信とは卽ち統一であり、故にまた生命である。事毎に信あれとは、それは現實個々の實行に具體化せられて其の統一的生命たるの眞義を得ることを示し給ふのである。道德的眞僞の區分、現實行業の成否、一切は內心の信にあることを明かして、こゝに「群臣共に信あらば何事か成らざらむ。群臣信なきときは萬事悉く敗る」と仰せられ外的施設の形式に依憑すべからざる動亂無極の人生を照徹して、上下同胞融合の信念が外界の困苦を制御するに到つて國民生活は永遠にその開發進展を成就すべきことを開示し給うたのである。これまことに勝鬘經義疏の「三分を捨つること」の御心と照應して、國と民とのために死を念じ給ひ、こゝに國民生活の運命を荷負しましゝ永劫忍苦の信に生死解脫を體驗し給ひ、一切の痛苦と障礙とに戰ひて同胞哀愍の敎化經營に盡させ給ひたる嚴肅悲痛の內生を示すのである。常に內治外交を三寶興隆と表裏せしめて、平等大悲の敎化精神に國民の心靈を

養育したまひ、此に立つて現實國家の統治經營にわが文化の永久的根柢を確立あらせられたる一代の御事業は、この御精神によつて眞に理想と現實と、教化と政治と、其の相卽一致に生命あらしめられしことを憶念するのである。當代支那と對等の交際を成立せしめて「東ノ天皇敬二白西ノ皇帝一」の國書、又「日出ル處ノ天子致ス書ヲ日沒スル處ノ天子ニ無キヤ恙」の外交辭令に國威を光闡し給ひきと傳ふるのも、又この御精神に依る國內文化の充實と、大陸文化批判綜合の大業とに基くことを信知して、こゝにその內的威嚴の根柢を仰ぎまつるのである。

註　一本「群臣共に信あらば」は君臣となる。若し群臣なりとすれば　大君のもと群臣（又國民の意にも通ず）同信協力以て事に當るべきの意を示し給ふものと拜し奉る。君臣とすれば憲法第一條の上下和睦の御言葉に示されたる君臣一體以て事に當るべきを宣はせ給ふものと解し奉る。大御心に於いて大差なきを信ずるのである。

第四編　聖德太子の御思想表現法と法華義疏の獨創的內容を論ず

一、序　說

わが建國の精神は、聖德太子の思想と事業に於いて世界的日本の曙光として輝き出でたのである。固有民族文化と大陸文化との交流接觸の時代に出現せさせ給ひ、わが日本の國礎を確立せられたる一代の政治は、また三經義疏にあらはれし如き大陸思想批判綜合の內的事業にその根柢を置かれたのである。太子が維摩經義疏(序說)に自ら「國家の事業を煩となす。但大悲息むことなく、志益物を存す」と宣ひし御言葉には、この御事業が眞に人生の悲痛に徹したまひし偉大の御精神に依つてのみ成就せられたるを偲びまつるのである。「國家の事業を煩となす」とは、外的功業の成果に究極價値を求め給はざりし嚴肅至心の內生を示すのである。而も國民の痛苦を常に自らのそれとし給ひ、「大悲息むことなし」と告白して、國家の事業に一代の勞苦をさゝげ給うたのである。大乘佛敎並びに儒敎を中心とし、當代大陸の相異せる思想の各要素は、この國家生活の運命を荷はしましゝ雄大悲痛の御精神に批判統御せられ、我が文化の重大轉機

に國民の進むべき一すぢの道は照明せられたのである。されば日本思想の特質を抽象して、單に現實的、活動的なりとし、之を印度思想の觀念的、また支那思想の論理的のそれと對照說明する如きは、決して思想開展の眞相を究盡せるものではない。眞に現實的威力を有する國民生活はまた人生の核心に徹する如き偉大深刻の精神に依つて導かれしことをかへりみなければならぬのである。

三經義疏並びに憲法拾七條は、かくの如き御精神を言葉として無窮の國民生活に留めたまひしものである。大御姿はたゞちに仰ぎまつらざれども、大御言葉のたかきしらべは、とこしへの世を照します大御心を、さながらに我等が胸に戴きまつるのである。實に太子の御著作は其の形式に於いては經典註疏の如くであるけれども、其の內容の特質は外來の概念理論に止まらせ給はずして、更にそを生命化せし信念體驗の表現であることに存するのである。學術的研究の著作、また宗教的信仰の表白といへども、それが切實深刻の人生觀を內容とするときは必ずそこに藝術的表現の性質を伴ふのである。故に太子御著作の研究は、單に語義の訓詁、また教義の解說に依つてのみ之を成就せらるべきではない。國民的憶念の信に基きてその御言葉の微妙の脈絡に心的內容を洞察し、此にこれらの知的作業を統一することに依つて始めて到達せらるべきである。卽ち言葉の生命に對する藝術的直觀に一切の分析的研究を綜合することであ

る。こゝに廣義に於ける國文學史的研究が適用せらるゝのである。凡そ三經義疏の御言葉は之を外的見地よりすれば全く漢文の如くである。而も國民精神の世界的生命を光闡したまひし一代の御思想は、決して常途の漢語漢文に依つて開示せられたのではない。教理と德目とを示す漢語の概念を內的純化する體驗の表現は、やがて國語的微妙の節奏を偲ばしむる文體語勢を伴うたのである。此に三經義疏について之を廣義の國文學史的研究對象とすることは、この思想と表現と、內容と形式と、その不離なる事實の洞察に基く內的自然の要求である。殊に太子の御出現は之を我が日本の歷史傳統とまた上代國民精神生活の根柢とより考察しまつらねばならぬのであつて、三經義疏及び拾七條憲法の思想は、また記紀萬葉の神話・歌謠に表現せられたる我が上代の精神と表裏照應するものである。故に「こゝろことば」としての「ふること」の研究に依りて日本精神の源泉を記紀萬葉の內容に辿るべき藝術的研究は、三經義疏のそれと補足照應して日本精神史の根本的研究に貢獻せらるべきを信ずるのである。三經義疏の國文學史的研究は正にかくの如き重大の任務を有することを思ふのである。

既に前編に述べし三經義疏研究は、以上の精神と方法に基きて太子の人生觀と教化思想とを中心とし、大陸思想に對する選擇批判の一端を著者の貧しき知識と足らはぬ體驗を以て述べあらはしゝものである。本編は之が附論として特に專ら言語表現の問題を中心とし、太子に依つ

て具現せられたる日本精神の世界的發現に對し、其の實內容を光闡すべき研究の一助たらしめんとするのである。殊に三經義疏の中、法華義疏に於いては之が參考たりし光宅大師の法華義記と對照して其の教義解明の形式が兩者頗る相似せるところ多きを見出すのである。故に近代學徒の間に於いても、或は太子の義疏を以て光宅の外多く之を出でずとし、又その特質を論ぜんとするものも殆んど教理の一面、經典の部分的註釋に就いて之をいひ、單に大陸經疏と比較して其の概念の異同を說くに止まるのである。されば光宅師の解釋との相違を論じつゝも、他の大陸經疏と其の說相の共通せる如き個所に到つては、直ちに之を同說としてその心的內容の相違を看過するに至るのである。日本思想の綜合的體現者としての太子の御著作の內容が、當代支那の思想文獻に對しその有する特質と價値との如きは、かくの如き外的研究に依つてはつひに究明せらるべくもないのである。既に鎌倉時代に三經義疏の全註解に生涯をさゝげ、この研究に永久的功業を殘されたる凝然大德の如きも、なほ教學的研究の領域に終始せる內容は、上宮法華義疏に就いて之を光宅義記と比較せる一節に、

「光宅の本疏は文相極めて廣し。今の疏は要を括り意を取りて之を引く。義理意致、炳然として見易し。」（法華義疏慧光記卷三〇）（大正大藏經經疏部五―一二頁上段）

といふ如きに示さるゝのである。卽ち光宅の義記がその文相極めて廣大煩瑣であるのに對し、

太子の御疏は能くこれが大意を取つて意趣明徹なりといふのである。けれども我らの見地を以てすれば義記の文相の廣大であることは、むしろその文章の冗長にして說明に墮せるもの多きを見るのであつて、太子の御疏が「要を括り意を取りて之を引く。義理意致、炳然として見易し。」といふ如く見ゆるのは、決して其の大意の概括、文言の簡明に終れるのではなく、其の敎說の選擇純化の極みは自ら表現形式の簡素となつて內容の深刻となりしことを示すのである。こゝに自ら反映せらるゝ太子御製疏の表現の特質は太子の人生觀また信念の精微の內容を偲ばしむるのである。故に概念敎義の解說、單獨語義の分析の如きは、その內容の價値批判に役立つところの材料として重んぜらるべきであるけれども、而もこの外的研究を以て直ちに內的研究に置き換へんとするときは、眞に偉大の精神を表現する文獻といへどもなほその內的光輝を覆蔽せらるゝに至るのである。かくの如き外的研究を固執せる結果が、國民文化の意義ある究明を障礙することは古今に通じて少くないのである。言葉と精神とを常に不離の關係に置く文學的研究は、啻に純粹文學的作品の上に止まらず、一國文化に至大の關係を有する如き思想文獻に對して其の表現特質の心理的究明に依つて之が內的人生的價値を批判し、こゝに國民文化研究に其の指導的光明を與ふべきを思ふのである。

凡そ國民文化の開展を窮盡せんがためには、國民生活の推移變遷の外的條件を研究し敍述す

ることも決して不必要ではない。けれども人生活動の眞相は無心放在の天地自然と異り、その一切の出來事はそこに內的動機の存在することをかへりみなければならぬのである。即ち吾人日常の經驗に於いては、肉體を離れたる精神もなく、主觀を離れたる客觀もない。故に人生現象はその意識的と無意識的とに拘らず、必ず何者か意志の存在に依つて生じ、意志のある所にはやがて目的を定立し、價値を判定する心的活動を現ずるのである。こゝに文化史的研究は外に現はれたる政治經濟生活の變遷についても、其の內的根據としての思想信仰との關聯內容を明かにし、その複雜轉化の迹を辿ることに依つて、此にはじめて生きたる人生法則を徹見し得べきである。故にこの內的根柢を表現する文學作品また思想文獻の心理的研究は、歷史的、社會的諸般の研究を統合して、こゝに文化開展の眞相を究明すべき重大任務を有するのである。一定文獻の書誌學的判定また語義語法の訓詁研究の如きは、即ちそれがための素材であつて、そこに究極價値を置くべきものではない。

凡そ人間生活の心的內容を表現するものは、之を必ずしも文獻にのみ限定すべきではない。けれども繪畫・彫刻・建築・音樂等に對し、文獻は吾人日常生活に最も普遍密邇の關係を有する言語を內容とするが故に、それが最も代表的なものであることはいふ迄もない。この文學作品、また思想文獻は個人作者を要するけれども、この個人作者は必ず時代また社會生活を背景

とし、又それを表現するものなるが故に、この文獻を中心とする文化史的研究はやがて個人と社會、また天才と民衆との關聯のそれとなるのである。

しかし乍ら此に個人と社會、天才と民衆の關係といふといへども、その個人また天才は、決して抽象空虛の世界人であるのではなく、一定の國土に在る民族として生存し、その內的生命を無窮に殘しつたへし人をいふのである。天才の精神が國民生活の相違を超えて弘め傳へらるるといふのも、それは彼等がその民族精神の涯底を究め、こゝに人類普遍の心情に徹したるが爲である。又文學作品といひ、思想文獻といふも、その構成要素たる言語は決して一樣ではない。我らにとつてその最も直接なるものは、卽ち國語文獻であり、國語の生命を味識することに依つて外國語の鑑賞研究もまた自ら可能となるのである。けれども一國文化史上に於いて古今幾多の文獻のうち、その如何なるものを選擇して、國民的生命を代表する如き人生價値の表現を求むるかは、また國民教化の精神と關聯する重大の問題である。こゝに國民生活の全開展を背景として或人格の薰化事業と共にその精神表現としての文獻に對し、言葉の心理的鑑賞研究に依つて之が內的價値を照明すべき國文學研究は、やがて國民思想の歸趨を指導すべき知的作業となるのである。我らはこゝにかしこくも　明治天皇の「書」また「歌」について示したまひし大御歌を仰ぎまつるのである。

ふみをひらきてむかしをおもふ
披書思昔

のこしおく書をしみればいにしへの人の聲をもきくこゝちして　（明治三七年）

披書知昔

あらはしゝ書を教へとなしにけりむかしの人のこゑはきかねど　（四二年）

月似古

いにしへの人のことばもうたひけりそのよに似たる月にむかひて　（三六年）

披書知昔

文みれば昔にあへるこゝちして涙もよほす時もありけり　（三六年）

歌

まごゝろをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり　（四一年）

新しきふしはなくとも呉竹のすなほならなむ大和ことの葉　（三八年）

すなほにてをゝしきものは敷島のやまと詞のすがたなりけり　（三九年）

事もなくしらべあげたる言の葉の花にぞ匂ふ國のすがたも　（四〇年）

現身の人のまことを萬代にのこすや歌のしらべなるらむ　（四〇年）

まごゝろを限りなき世にとゞむるもやまと詞のいさをなりけり　（三九年）

こゝに大御歌を引用しまつることは決して單に研究方法の問題のためではない。日本精神を綜合具現したまひし大御心を仰ぎまつる國民のこゝろは、此に大御歌を拜誦して人生の歸趨を求めまつるのであつて、我らが學びのみちもこれによつて亦自ら導かるゝのである。これらの大御歌は直接には國民藝術の中心としての歌について、又古の人の殘しゝ書について示させ給ひしものであるが、同時に廣義の國文學史的研究の原理をもさとらしめらるゝのである。以上幾度か言語表現と國民文化との關聯を考察し、殊に國民的生命を代表する如き思想表現としての文獻を選擇し、その內的價値を闡明して國民精神生活を開導すべき使命も正しき國文學史的研究に依つて實現せらるべきを論じたのである。けれどもこゝに大御歌を仰ぎまつりてその研究も亦つひに研究者自身の內心の問題に歸着することを信知せしめらるゝのである。一たびきけば忘れざるまことの歌、うつそみの人のまことを萬代にのこす歌のしらべ、それは卽ち目にみえぬ人のこゝろのまことがもとであることを示し給ふのである。されば、こともなくしらべあげたる言の葉の花に國の姿は匂ふとも宣はせ給ふのである。切實眞摯の內心に伴ふ自然簡素の表現に國民精神のまことが示さるゝのである。故に一切の言語問題は常にその表現せらるべき內的體驗より開明せらるべく、此に我らは自ら足らはぬ姿に覺め、虛僞の技巧空虛の概念を去つて、眞實の生命に、またそを現はすまことの言葉に向はねばならぬのである。國の姿をあ

らはすごときまことの言葉を理解し、濁惡の世を導く如き言葉のいのちを味識することは、眞に人生を窮めたる偉大悲壯の精神にめざむることである。生死無常の人生ははかなきものであるけれども、人のこゝろのまことは言葉に殘されてとこしへに傳はるのである。うつしく見ぬ人も言葉によりてその心の聲を聞き得ることを示し給ふのである。この人の心のまこととは、濁亂の人生にめざめて求道精進し、蒼生と苦樂を同じうして國にいのちをさゝげしごとき、全體人生の情意に徹入せしところの「すなほにてをゝしき」人のまごころである。わが生のつたなくはかなきをかへりみて、　このとこしへの世を照す如き人のこゝろをその殘されしことばに求め、此に感應相稱の世界を見出すとき、有限の個人生命が無窮の全體生命に歸入するのである。こゝにまごころを限りなき世にとゞむるやまと詞のいさをを示したまひ、また世になき人のことばもありし日の如き月の夜にうたはせ給ひ、こゝろのまことのつきざるいのちをよびさまし給ひし大御心を仰ぎまつるのである。永久生命を示す言語表現の鑑賞研究はつひに生と死と、個人と全體と、この人生歸趨の問題を導くべき學びの道であり、それは人生の悲痛にめざめ、悠久のまことを念ふこころによつてのみ實現せらるべきものである。故にこの研究者の研究をあらはす言葉も世の常なる概念の說明、技巧の遊戲を超出し、永久生命の影を偲ばしむる如き精微の內容をあらはし示すべきである。國語表現をその對象とする國文學史的研究は最後

にこゝに到達せらるべきであつて、其の眞實の研究の開發進展は國民教化の問題と關聯して正しく我等青年の使命であると信ずるのである。我等はかくの如きこゝろをも、明治天皇御集によりて照し示されつゝ、このねがひをかしこくも千三百年前日本文化開展の根柢を確立したまひし　聖德太子の研究に實現せんとして、恩師學友の指導の下に幼き研究の歩みをつゞけんとするのである。

二、大乘經典の藝術的鑑賞と大陸佛教思想の內的純化

聖德太子はわが文化の黎明の時代に出現し給ひ、當代大陸の思想學術を博綜せさせ給うたのである。けれども太子はこれらの思想學術を以て直ちに人生そのものを律し給うたのではない。實に太子の御思想の特質は、國民生活の運命を荷はせ給ひし力の偉大なるが故に、自ら教學理論の領域に跼蹐せさせ給はずして、更に之を統御すべき信念體驗の事實を重んぜさせ給ひたる、その內心の威力に存するのである。

斯の如き內心の信は決して常途の教義的解明によつて表現せらるべきものではない。宗教的信念の表白、また思想學術の敍述と雖も、それが人生の永久を照す如き切實深刻の人生觀に基

くときは必ずそこに藝術的表現の微妙性を伴ふのである。されば太子の大陸思想に對する選擇批判の御精神も、啻に三經義疏と大陸經疏との比較に依つて、其の學問教義の特質を闡明するのみに止まらず、之が文體の弛張、用語の純雜の如き言語表現の藝術的價値を批判對照し、此に教理の概念に於いては尙相等しきが如く見ゆる思想にも、其の心的內容の相違を徹鑒することに依つて、更に明かに顯彰せらるべきである。「言靈の幸はふ國」とうたはれし日の本の國に皇子と生れさせ給ひ、我が文化の根柢を確立あらせられし大御心は、また一代の御著作も常に直くしてをゝしき大御言葉の姿に、國民生活の內的進路を照明せさせ給ふのである。

凡そ太子は大乘佛典の言葉に向はせ給ひても、常に之を概念的理解に依つてのみ攝取し給ふことなく、大聖の信を傳ふるに生きたる言語として、人生事實の上に味識し給ひ、此に教義の分析的研究はすでに綜合的信念に統攝せられ、自ら大陸思想の選擇純化を實現したまふのである。卽ち勝鬘經序說に波斯匿王がその女勝鬘に對し、佛德を讚嘆して大乘の歸依をすゝめんがため、夫人と共に書を遣しゝとき、勝鬘之を披見して歡喜信受し、其の使者に偈を說きし文中「我聞ㇾ佛ノ音聲ㇾ」とあるを、次の如く釋せさせ給ふ御言葉は正しく此の精神を顯すものである。

「而るに勝鬘は但書を見るのみ。那ぞ我聞ㇾ佛ノ音聲ㇾといふことを得るとならば、聲は以て意を傳へ、書は以て聲を傳ふ。故に書をば義を以て聞ㇾ佛聲ㇾといふなり。又見し聞し覺すること

は、書に從りて解を得るも亦稱して聞となす。」

これ吉藏菩薩が其の著寶窟に、

「我聞二佛音聲一とは、我は父母の佛の音聲を歎ずるを聞くが故に、我、佛の音聲を聞くといふなり。」（大正大藏經經疏部五―一二頁上段）

と釋し、又慧遠法師がその勝鬘經義記（卷上）に、

「初めの偈の中に就いて、我佛の聲を聞くとは、書の告ぐる所を領するなり。向來勝鬘は眼を用ひて書を讀み、曾つて聽くべからず。何が故に聞くと言ふや。釋して言く、根葉相助くるの義あり。前土の夫人、書を作りて、女に告ぐるに、身を以つて口を表はす。勝鬘、書を讀むに目を以つて耳に代ふ。故に聞くといふなり。佛、舍衞に在り。勝鬘未だ觀ぜず。何ぞ、已に我佛の聲を聞くと言ふを得んや。此は書中に佛の名聲を導ふを聞けるものにして、佛語を聞くに非ざるも、佛聲を聞くと名づけしなり。」（大日本續藏經第三〇套第四册）

と註する內容と對照せらるべきである。卽ち吉藏師は之を唯勝鬘が其の書に依つて、父母が佛の音聲を歎ずるを聞けるを釋するのみであつて、そこに何等の思想內容を見出すことは出來ない。又慧遠師の文も單に父母の書を作すことは身を以つて口を表し、勝鬘の書を讀むことは目を以て耳に代ふるとなし、其の聞佛聲の意義も亦書中、佛の名聲を稱ふるをいふとなすのであ

る。すべて一般的解釋の外多く出でざるを見るのである。然るに太子は勝鬘が但書を見て而も「聞二佛音聲一」といへるに對し、之が內的意義を論じて「聲は以て意を傳へ、書は以て聲を傳ふ」と宣ひ、書の言葉に依つて生きたる人格の聲を聞くべきことを示し、聲は又心を傳ふるものとして、こゝに心の詞として、書を內心の祕奧に生きしむべきを暗示したまふのである。これまことに經典の言葉に生きたるいのちの表現を求め、空虛の教訓、概念の遊戯を排したまひし嚴肅至心の內生をあらはすのである。されば維摩經義疏には、經典佛國品の「佛以二一音一演二說法一。」とある、その一音の解釋について煩雜の訓詁の存することを擧げさせ給ひつゝ、而もそれらがつひに經語の眞義に契當せざることを示し、最後に

「こはこれ假說。作さずして則ち止みぬ。作さば則ち作すこと能はざることなきなり。」

と仰せられ、休みなき辯證の循環に陷る迂回の思想法を排除せさせ給ひ、此に空虛の訓詁に囚はれざる內的自由の生命は、常に經典の言葉を直接體驗の事實に內的化したまふのである。故に法華義疏に於いては、屢光宅大師がその煩雜の論理を以て經典の形式的解釋を構成せんとする如き態度に對し、例へば分別功德品の文中に

「此の中の文は本義に微妙に細釋すれども、而も受くること能はざるが故に文に隨ひて直ちに唱ふるのみ。卽ち所謂闕きて審かならざる所なり。」

と論じ給ひ、外的假定の理論に依つて之を解明するのではなく、文に隨ひて直ちに唱ふべき藝術的洞察によつて言葉の生命を徹鑒し、之が內的意義を究盡したまふのである。されば、同じく光宅大師が特に或る形式に律して經典を註する場合のごときは、例せば

「本義には重を分ちて解釋す。而れども今は但文に隨ひて直ちに釋し、重を分つことを須ひず。」(法華義疏序品)

とその機械的解釋を批判したまひ、直ちに文の內的脈絡を重んじてこゝに全一的精神を攝取すべきことを宣ふのである。これまことに國家統治の上に於いては常に制度政策の形式に止まらず、之を生命化すべき同胞協力の信を重んぜさせ給ひ、「群臣共に信あらば何事かならざらむ。群臣信なきときは萬事悉く敗る」(憲法第九條)と示し、政治の組織と其の運用も之を統御すべき「人」の全體生命體現にあるべきを宣ひ、一切の外形を內心の威力に總攝すべき指導精神を開示したまひしと一つのみこゝろにましますと仰ぎまつるのである。されば經典の言葉も之を「心詞」として、書をよませ給ふにも常に永久生命の信を念じ給ふ大御心に生きしめ給ひ、ここに例へば「八音の妙嚮機に稱ひて說く」(維摩經義疏佛國品)また「六道に府應して衆生のために法を說き、機感に差ふことなきなり」(維摩經義疏方便品)とある如く、聖人の言葉の人間內心に徹する深甚微妙の眞趣に徹到して、まことの言葉にまことのいのちを極め、之を國民生活の體驗

に融化して、此に開發さるゝ人生の信を體現し給ひ、國民教化のために大御身を盡しましたのである。故にこの御精神を示させ給ふ三經義疏は、之を外的見地を以てしては經典註疏の知的作業を內容とする如くであるけれども、一切の教義と理論とを內的化し給ふ信念の表現は、自ら尋常經疏の形式と異り、その大御言葉は藝術的創作を偲ばしむる心的節奏を波うたすのである。此に勝鬘經義疏に經典序說の文中、波斯匿王がその夫人と相語つて、

「勝鬘夫人是我之女。聰慧利根。通敏易悟。若見佛者。必速解法。心得無疑。」

とある言葉に對し、次の如く釋し給ふ大御文を仰ぎまつるのである。

「聰慧利根とは、耳に善く聽くを聰と曰ひ、心に明かに察するを慧と曰ふ、聰察爽明なる之を利根と謂ふ。通敏にして悟り易しとは、表を聞きて裏に達する之を通といふ、善く聽くの致す所なり。照了深明なる之を敏といふ、善く察するの致す所なり。理に遇ひて卽ち解する之を悟り易しといふ、利根の致す所なり。前の句は其の性能を談じ、後の句は其の功用を言ひ、共に相成ずるなり。教を稟くるは必ず善く聽くに由るが故に、聽を歎ずるを首となす。此は器已に具はることを明かすなり。必ず速かに法を解せんとは、一たび聞きて卽悟して再教を待たざるなり。心疑なきを得んとは、神情開朗にして小乘の疑滯なきなり。」

これまた吉藏師の寶窟に此の文を釋せる內容と對照せらるべきである。蓋し吉藏師の寶窟（卷

上本）は自ら其の序に、

「余、翫味すること既に重し、鑽鑽年を累ね、古今に捃拾す。經論を搜檢し、その文玄を撰び、勒して三軸と成す。」（大正大藏經經疏部五―一頁下段）

といふを以て見れば、支那大陸の勝鬘經に關する古今の學說を博涉し、此にその經釋を大成せることは既に明かである。文中其の形式に於いて太子の御釋と相似せる內容を見、又太子が取捨したまひし學說を列擧するを見れば、太子が考究したまひし教說を同じく搜檢せしもの多きを知ると共に、また寶窟と上宮御製疏との對照は、太子御釋の特質を窺ひまつる上に益すること少からざるを思ふのである。

吉藏師の曰く、

「聰慧利根、通敏易悟とは、第二に女の德を歎ず。女もし德なければ、報ずと雖も益なし。良に德あるに由りて、報ずれば必ず利を蒙る。故に女の德を歎ずるなり。智の耳に在るを聰と曰ひ、利智の心に在るを慧と曰ふ。速疾に理に達するを利と稱し、能く妙解を生ずるを根となす。故に聰慧利根と云ふなり。通敏易悟とは上はその內解を歎じ、今はその外學を美す。博く事理に達するを通と曰ひ、內明、心に在るを敏となす。一たび聞けば卽ち領するを易と稱し、未だ解せざるを解せしむるを悟と名づく。問ふ。善く聽くを聰となし、善く察す

るを明となす。今何が故に聰慧と云ひて、明慧と言はざるや。答ふ。今正に示すに聞に因りて悟を得るが故なり。若見レ佛より下は、上に其の内德を敍す。今第三に外、勝緣に値ふを明かす。或は其の自ら佛所に往くを勸むべく、或は其の必ず能く通感するを知るべし。仰ぎて金容を覩るを見レ佛の義となす。見レ佛とは佛寶を見るなり。必速解レ法とは、法を聞きて能く解するを明かすなり。必速解レ法とは解を謂ふなり。心得レ無レ疑とは信を謂ふなり。」（勝鬘經寶窟卷上本）（大正大藏經經疏部五―一〇頁下段―一一頁上段）

即ち「聰慧利根」について、吉藏師が之を「智の耳に在るを聰と曰ひ、利智の心に在るを慧と曰ふ。速疾に理に達するを利と稱し、能く妙解を生ずるを根となす。」と釋するに比ぶれば「耳に善く聽くを聰と曰ひ、心に明かに察するを慧と曰ふ。聰察爽明なる、之を利根と謂ふ。」と宣ふのは、形同じきが如くしてその内容は著しき對照を見しむるのである。即ち吉藏師は聰慧利根を釋するに單に利智の義を以て之を明かせるに對し、太子は耳に善く聽くを聰といひ、心に明かに察するを慧となし、之を直接耳にひゞき心に味はるゝ所の生きたる教法の信受體達とし、こゝに聰慧の眞義を窮めさせたまひ、また聰察爽明なる之を利根といふと示して、利根とは啻に利智聰敏の特殊能力の讃嘆ではなく、人生の涯底に徹する微妙の洞察の爽かに明かなる人の心なりと宣はせ給ふのである。理智的觀念の世界を示すのではなく、現實の五官と心を

通じ、永久の世を照す信の世界を體驗する內的生活の生きたる表白である。こゝに經典の聰慧利根といふ勝鬘夫人の性能を示す成語は、信念の情操に生命化せられるのである。また「通敏にして悟り易し」といふ經語も、之を吉藏師が「博く事理に達するを通と曰ひ、內明、心に在るを敏となす。一たび聞けば卽ち領するを易と稱し、未だ解せざるを解せしむるを悟と名づく。」といひ、通常の說明の外多く出でざるに對し、太子は「表を聞きて裏に達する之を通と謂ふ、善く聽くの致す所なり。照了深明なる之を敏と謂ふ、善く察するの致す所なり。理に遇ひて卽ち解する之を悟り易しと謂ふ、利根の致す所なり。前の句は其の性能を談じ、後の句は其の功用を謂ひ、共に相成ずるなり」と宣ひ、同じく通を釋すといへども、吉藏師が博く事理に達すとその外學の博きを語るに對し、太子は表を聞きて裏に達するの謂を以て釋せられ、更に之を善く聽くといふ內心の眞實に徹到し給ひ、外なる才能よりも內なる信を重んじ給ふのである。故に敏といふも唯內明心に在りといふ如きに止まらず、善察の致すところとし、之を照了深明と示して、言の葉にいひつくすべからざる、されど深甚微妙の信に一切を照す眞智の體感なるを示させ給ひ、此に一切の敎義を人生心理の洞察に融化する精微高明の心境を開示するのである。「悟り易し」といふことを利根の致す所と說く語は、かくして單に個人能力の卓越を讃美するものではなく、希有最勝の信の體得を示す言葉として純化せらるゝのである。而も聰慧

利根と通敏易レ悟とを對照して、之を夫人の性能と功用を讃すと示し、其の相關を說いて「共に相成ずるなり」と結ばせ給ひ、理解と信念と、認識と體驗と、一切を人生事實に渾融して、こゝに最勝の道を體現すべき宗教的人格の心境を啓示するのである。太子の御釋に於ける御言葉も之と同じきものを吉藏師の文に求むれば、そこに散見するもの必ずしも少くはないのである。而も太子の大御文の渾然たる統一は簡素にして情趣ふかき內容を示され、利根を釋して聰察爽明と宣ひ、敏を說いて照了深明なりと示さるゝごとき、無限の大御心は此にいひつくすべくもあらぬのである。されば「心疑なし」といふ言葉についても、之を吉藏師が唯「信を得」とのみ釋するに對し、「神情開朗にして小乘の疑滯なきなり」と宣はせ給ふは、また常に小乘を以て個我超脫の人生觀として排し給ひ、大乘を以て他と共なる生を念じて敎化救濟につくす眞實の大道と示させたまふ大御心と對照して、此に個我を全體に沒し、苦樂を分つ眞實の信に神情開朗といふ、ひろく朗かなる心を味識し給ひ、一切にあまねき安慰の光明をそゝがせ給ふのである。これ常なる敎義の解明でもなく、また單なる解脫の心境の開示でもない。「群生（ぐんじやう）と苦樂を共にす」と宣ふ大空のごとくひろくさやかなる情意の藝術的表現である。これまことに現實悲痛の生にめざめたる偉大の精神のさやりなき大きいつくしみをあらはすのである。これ決して大陸諸經疏にあらはるゝ如き敎學理論の煩瑣なる理智的世界ではない。記紀萬葉の歌に現

はるゝ如き生きたる情意の世界を偲ばしむるのである。

外來の經典論疏を考究したまふにも、常に外なる理論に依らせたまはずして直接の信に、また內心の情趣に生きしめ給ふ大御言葉のたかき調べは、國民精神の世界的生命を具現せさせ給ひし偉大の生命の眞證たるを信ずるのである。

現生親子の芳縁に如來大悲の反映を思ひ仰ぎ、衆生教化の慈悲心に親子恩愛の情意を開展する、このさやりなき廣大の信の世界を、今この洞察を極めたまへる大御言葉にうつしくも仰ぎまつるべきである。片岡山にいでまして臥せる飢人をいたませたまひ、

しなてる　片岡山に　飯に飢て　こやせる　その旅人　あはれ　親なしに　なれなりけめや　さすたけの　君はや無き　飯に飢て　こやせる　その旅人　あはれ

とよましましゝ御歌にも「親なしに　なれなりけめや」と家庭恩愛の生に幸うすき名もなき民草の上をあはれませ給うたのである。この家庭的情意の眞實の體驗によりてこそ、一切衆生を養育する大聖の教化精神もまた現實人生に生命化せられるのである。これらの大御言葉は單に慈悲の概念でもなく、また孝の理論でもない。家族的眞情を全國民にそゝがせたまひ、又御家

庭の御生活に全體國家生活憶念の至誠を貫きましゝ內的生活の表白である。そこに「唯佛是眞」とのりましゝ眞實生命の光明が黑闇の世にかゞやくのである。

永久生命の道が家族的情意に生き、同胞全體の生を思ふ眞實の精神が又この裡に開展する國民的家庭宗教は、正に太子の信念體驗によつて國民に教へられたのである。又山上憶良が

子等を思ふ歌一首並に序

釋迦如來、金口に正しく說き給はく、等しく衆生を思ふこと、羅睺羅の如しと。又說き給はく、愛は子に過ぎたるはなしと。至極の大聖すら尙子を愛む心あり。況して世間の蒼生、誰か子を愛まざらんや。

瓜食めば　子ども思ほゆ　栗食めば　ましてしぬばゆ　何處より　來りしものぞ　眼交にもとなかゝりて　安寢し爲さぬ

反　歌

銀も金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも

とうたひて釋迦如來も、又そのみ子をうつくしむ心を以て、一切衆生を思ひたまひしことを說き、うつし世の人々の子を思ふ心に自ら佛のくもりなき慈悲の光明をも思ひしこゝろは、又太子の御精神と何處かに通ふいのちをも偲ばしむるのである。太子の御精神は常に個人家庭より

も寧ろ、國家の公に、蒼生の全體にかゝりたまふけれども、その根本に流るゝ廣大の大悲心は、痛切の家庭的情意をひそむるのである。それはまた憶良によつて表現されし如き日本家族生活の情調を內にたゝふるのである。我が國民生活には古代に孝の理論はなかつたけれども、支那の道德思想に生命をあたふべき內なるまことの力は國民生活の、底ひに流れてゐたのである。萬葉集に防人がその家庭を離れて遠く任に赴くときによめりし歌、

忘らむと野ゆき山ゆきわれ來れどわが父母はわすれせぬかも

父母がかしらかきなで幸くあれていひし言葉ぞわすれかねつる

わが母の袖もちなでゝわがからに泣きしこゝろを忘らえぬかも

蘆垣の隈所にたちて吾妹子が袖もしほほに泣きしぞ思はゆ

おほきみのみことかしこみ出でくれば吾ぬとりつきていひし子なはも

松の木の並みたるみれば家人のわれを見おくると立たりし如

旅ゆきにゆくとしらずて母父にこと申さずていまぞくやしけ

母刀自も玉にもがもやいたゞきてみづらのなかに相まかまくも

月日やは過ぐはゆけども母父が玉の姿は忘れせなふも

白浪のよそる濱べにわかれなばいともすべなみやたび袖ふる

難波門をこぎでて見れば神さぶる生駒高嶺に雲ぞたなびく

國々の防人つどひ船のりてわかるを見ればいともすべなし

津の國の海のなぎさに船よそひ發出(たで)も時に母(おも)が目もがも

彼等は歌をよむがための歌人ではなかつた。しかしその内心のまことが自ら表現せられて歌となるとき、悠久に人の心に徹する言の葉をとゞめたのである。そこに目にうかぶものはあるがまゝの人生に戰ひ生くる悲喜の情意である。その巧まぬすなほなる表現に、遠海はるかに親を思ひ家を思ふ痛切の心の、既に切實恩愛のまことのうちに沒せられてあるを見るのである。彼らの「うた」が個人的特異性を止めぬほどに、切實の全人生的感情をうたひあげたるは、その沒我的感情に現實悲喜の動亂そのまゝをやがて宗教的解脱に誘ふべき安慰のひかりすらも偲ばしむるのである。それは概念理論を以てはあらはしがたき痛切感情である。やまとの歌の生命はこのまことの生の脈搏をつたふるところにあるのである。この實人生に對する眞實の感情、家庭生活を貫く「まこと」は、やがて宗教教化の理想をも現實化するもとの力である。太子もまた家庭の歡喜と悲哀と愛情とを味ははせ給うたのである。法王帝説には太子が薨去の前日、同じく重き御病に勞ひましゝ膳夫人(かしはでのぶにん)が先だちて神あがりましゝを誄(しの)びて、

いかるがの富の井の水いかなくにたぎてましもの富の井の水

とうたはせたまひしを傳ふるのである。太子の解脱の精神は現實人生の恩愛に背くのそれではなかつた。それは國家と家庭とに共なる生を生くる我ならぬ内心の「まこと」の實現である。太子は常に「群生とその苦樂を共にす」と宣うたのである。この最後の御歌のつたへられたるは、また一代の劇的悲痛の内生をとこしへの世にとゞむるのである。佛教が隱遁超脱の教ではなく、眞に國民生活の體驗に生き、親鸞日蓮の人生宗教を開展せしめし事實は、正しく太子の御精神に、また記紀萬葉の祖先の情意に、その源泉を見出すのである。

思想教義が常に切實體驗を伴はしめられ、こゝに外來の經疏も自ら國民生活の信に生きしめられし事實は、これらの太子の御言葉に依つてそのうつしき具現が示さるゝのである。その外形に於いては光宅義記と同じきが如く見ゆる太子の法華義疏も、その大御言葉の鑑賞洞察に基く心理的分析によつて、此の大陸經疏に見出す能はざる深刻の人生觀を又雄大悲痛の信念の表現を仰ぎ得ることは、まことに「此是大委國上宮王私集非二海彼本一。」としるされし國民的自覺の眞證である。太子の大御文は、形式は經典註疏であつても、その御言葉の脈絡には、日本語のうたによつて示さるゝ如き情意の世界を偲ばしむるのである。外來の學問教義を融化して生きたる言語を以て内心の緊張を表現し得る國民は、同時に永久に生きたる精神を有する國民である。世界の文化を統御して進むべき祖國日本の生命は太子の大御言葉によつて正しくその曙

光を示されたのである。

一、聖徳太子憲法拾七條の全文

二、聖徳太子を中心とする系圖

三、聖徳太子を中心とする年譜

參考資料（その一）

一、聖德太子憲法拾七條

推古天皇十二年甲子夏四月丙寅朔戊辰三日
皇太子親肇作憲法拾七条（日本書紀）

一、に曰く、和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。人皆黨あり、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ。然れども上和き、下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。

二、に曰く、篤く三寶を敬へ。三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸萬國の極宗なり。何れの世、何れの人か、是の法を貴ばざる。人尤惡しきもの鮮し。能く敎ふれば之に從ふ。其れ三寶に歸せずんば、何を以てか枉れるを直さむ。

三、に曰く、詔を承りては必ず謹め。君をば則ち天とし、臣をば則ち地とす。天覆ひ地載せて、四時順行し、萬氣通ふことを得。地天を覆はむと欲するときは、則ち壞るゝことを致さむのみ。是を以て君言ふときは臣承る。上行へば下靡く。故に詔を承りては必ず謹め。謹まずんば自から敗れむ。

四、に曰く、群卿百寮、禮を以て本と爲よ。それ民を治むるの本は要ず禮にあり。上禮ならざ

れば下齊はず、下禮無ければ必ず罪あり。是を以て、群臣禮あるときは位次亂れず、百姓禮あるときは國家自ら治まる。

五、に曰く、餐を絶ち、欲を棄て、明かに訴訟を辯ぜよ。其れ百姓の訴、一日千事あり。一日すら尚爾り況や歳を累ねてをや。頃訟を治むる者、利を得るを常となし、賄を見て讞を聽く。便ち財有るものの訟は石を水に投ずるが如く、乏しき者の訴は水を石に投ずるに似たり。是を以て、貧しき民は則ち由る所を知らず。臣の道も亦焉に於て闕く。

六、に曰く、惡を懲し善を勸むるは、古の良典なり。是を以て、人の善を匿す无く、惡を見ては必ず匡せ。其れ諂ひ詐る者は、則ち國家を覆すの利器たり、人民を絶つの鋒劒たり、亦佞媚なる者は、上に對ひては則ち好んで下の過を說き、下に逢ひては則ち上の失を誹謗す、其れ此の如き人は、皆君に忠无く民に仁无し。是れ大亂の本也。

七、に曰く、人各任掌あり、宜しく濫れざるべし。其れ賢哲官に任ずるときは頌音則ち起り、奸者官を有つときは禍亂則ち繁し。世に生れながら知るもの少し。剋く念うて聖と作る。事に大小無く人を得て必ず修まる。時に急緩なく、賢に遇へば自ら寛なり。此に因つて國家永久にして社稷危きこと勿し。故に古の聖王は、官の爲に人を求め、人の爲に官を求めず。

八、に曰く、群卿百寮、早く朝して晏く退け。公事は盬きこと靡し。終日にも盡し難し。是を

以て、遲く朝すれば急に逮ばず、早く退けば事盡さず。

九、に曰く、信は是れ義の本なり。事毎に信有るべし。其れ善惡成敗要ず信に在り。群臣共に信あらば何事か成らざらむ。群臣信無きときは、萬事悉く敗る。

十、に曰く、忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心有り。心各執有り。彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎ぞ能く定むべき。相共に賢愚なること、鐶の端無きが如し。是を以て、彼の人瞋ると雖も、還つて我が失を恐れよ。我獨り得たりと雖も、衆に從ひて同じく擧へ。

十一、に曰く、明かに功過を察し、賞罰必ず當てよ。日頃賞は功に在らず。罰は罪にあらず、事を執れる群卿、宜しく賞罰を明にすべし。

十二、に曰く、國司國造、百姓に歛ること勿れ。

國に二君なく、民に兩主無し。率土の兆民王を以て主と爲す。任ずる所の官司は皆是れ王臣なり。何ぞ敢て公と與に百姓に賦歛せむ。

十三、に曰く、諸の官に任ずる者、同じく職掌を知れ。或は病し、或は使して、事に闕くこと有らむ。然れども之を知るを得む日は、和すること曾て識れるが如くせよ。其れ與り聞くに

非ざるを以て公務を妨ぐこと勿れ。

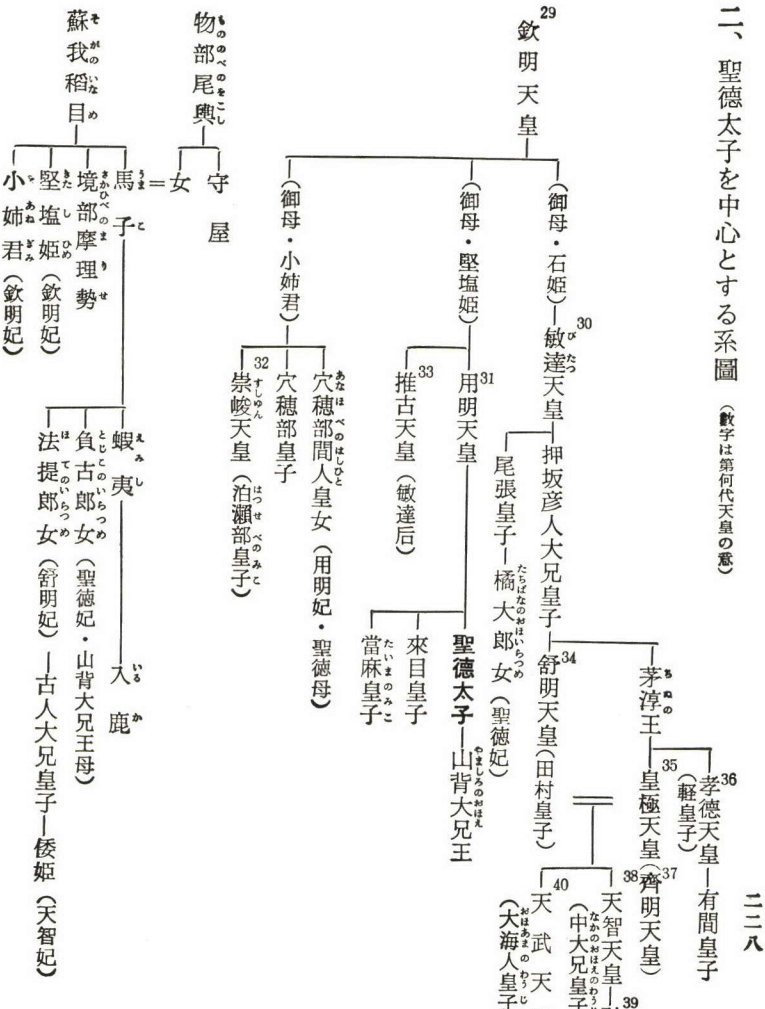
十四、に曰く、群卿百寮、嫉妬有ること無れ。我既に人を嫉めば、人亦我を嫉む。嫉妬の患其の極を知らず。所以に智己に勝るときは則ち喜ばず、才己に優るときは則ち嫉妬む。是を以て、五百歳の後、乃今賢に遇はしむとも、千載以て一聖を待つこと難し。其れ賢聖を得ずんば、何を以てか國を治めむ。

十五、に曰く、私に背きて公に向ふは、是れ臣の道なり。凡そ人私有れば必ず恨あり。憾有れば必ず同ぜず。同ぜざれば則ち私を以て公を妨ぐ。憾起れば卽ち制に違ひ法を害す。故に初章に云く、上下和諧せよと。其れ亦是の情なるか。

十六、に曰く、民を使ふに時を以てするは、古の良典なり。故に、冬の月は閒あり、以て民を使ふべし。春より秋に至るまでは農桑の節なり、民を使ふべからず。それ農せずんば何をか食はむ。桑せずんば何をか服む。

十七、に曰く、夫れ事は獨り斷ずべからず。必ず衆と與に論ふべし。少事は是れ輕し。必ずしも衆とすべからず。唯大事を論ふに逮んでは、若しくは失あらむことを疑ふ。故に衆と相辨ずれば、辞則ち理を得む。

二、聖徳太子を中心とする系圖（數字は第何代天皇の意）



三、聖徳太子を中心とする年譜

西暦	天皇在位	太子御年	太子關係事項	參考事項
五五二	欽明一三	生前二二		百濟聖明王、佛像・經巻を奉献。佛教採否をめぐり蘇我・物部論争。蘇我稲目、向原の家を寺とす。物部尾輿、寺を焼き、佛像を棄つ。
五六二	二三	一二		新羅、任那日本府を滅す。
五七一	三二	三		欽明天皇崩御、任那再興を遺詔。
五七四	敏達三	一	太子誕生「厩戸皇子」	百濟より日羅を召す。日羅、難波館にて從者に殺害さる。
五八三	一二	一〇		司馬達等、舍利を得。馬子、達等の女を得度せしめ佛殿をつくる。
五八四	一三	一一		馬子、佛塔を立つ。疫病流行す。守屋ら、寺を焼き、佛像を棄つ。
五八五	一四	一二		敏達天皇崩御。穴穂部皇子、不軌を謀る。物部、皇子を擁し、皇居をかこむ。
五八六	用明元	一三		

五八七		二	一四	太子、物部追討の軍に從軍。
五八八	崇峻	元	一五	天皇佛道に歸依し、豊國法師内裏に入る。
五八九		二	一六	用明天皇崩御。馬子ら炊屋姫の命を奉じ、穴穂部皇子を攻む。皇子・守屋戰死。
五九一		四	一八	馬子、法興寺を起工。
五九二		五	一九	中國において隋の文帝天下を統一す。
五九三	推古	元	二〇	厩戸皇子、皇太子となり、攝政となる。四天王寺を難波に起工。
五九四		二	二一	天皇、三寶興隆の詔を發せらる。
五九五		三	二二	太子、惠慈を師とす。
五九六		四	二三	法興寺完成。惠慈、慧聰この寺に住す。
五九八		六	二五	太子、推古天皇の請により勝鬘經を講ず(法王帝説)。日本書紀では推古十四年の事とす。
六〇〇		八	二七	任那復興を議す。新羅征討の軍二萬餘を筑紫に派遣。馬子、東漢直駒をして帝を弑せしむ。駒、馬子に殺さる。推古天皇(敏達皇后)即位。高麗僧惠慈歸化す。百濟僧慧聰來朝。筑紫より二萬の將兵歸る。任那救援のため、大將軍境部臣新羅に出征、新羅

六〇一	九	二八	斑鳩宮を造營。	降伏すれど再び叛す。
六〇二	一〇	二九		來目皇子を征新羅將軍として二萬五千を率ゐて派兵、百濟僧觀勒、暦・天文・地理書を献上。
六〇三	一一	三〇	天皇、冠位十二階を制定。蜂岡寺（廣隆寺）を造る。	來目皇子、筑紫に薨ず。當麻皇子を征新羅將軍とせしも妻死し征かずして歸る。
六〇四	一二	三一	憲法拾七條を發布。天皇、朝禮を改む。	正月始めて元嘉暦を用ふ。
六〇五	一三	三二	天皇、銅及び繡の丈六佛各一軀を作らしむ。佛工は鞍作鳥。高麗の大興王これを聞き、黄金三百兩を献ず。太子、斑鳩宮に遷る。	
六〇六	一四	三三	銅佛・繡佛共に成る。天皇、銅佛を元興寺に安置す。太子法華經を岡本宮に講ず。	
六〇七	一五	三四	天皇、小野妹子を隋に遣はし國書を隋の煬帝におくる。	天皇　太子をはじめ、百官を率ゐて神祇を祭拜せらる。

六〇八	一六	三五	法隆寺建立。用明天皇勅願の藥師佛（金堂藥師如來像）を作る（法王帝説）。	大和・山背・河内に池溝を掘り、國ごとに屯倉を置く。
六〇九	一七	三六		妹子、隋使裴世清を伴ひ歸朝。妹子、再び隋に使す。高向玄理・南淵請安・僧旻ら八人、留學生として隨行。
六一一	一九	三八	勝鬘經義疏成る。	妹子隋より歸朝す。
六一二	二〇	三九		正月の宴に馬子壽詞を奏上。百濟の味摩之歸化して伎樂を傳ふ。
六一三	二一	四〇	太子、片岡山にて飢者に遇ひ御歌及び御衣を賜ふ。維摩經義疏成る。	掖上池等をつくる。難波より飛鳥に至る大道をつくる。
六一四	二二	四一		犬上御田鍬らを隋に派遣。馬子病臥、ために一千人を出家せしむ。
六一五	二三	四二	法華義疏成る。惠慈、上宮御製疏を携へて歸國（法王帝説）。	犬上御田鍬歸朝。
六二〇	二八	四七	太子、馬子と議し、「天皇記」及び「國記」	

				を撰録す。
六二一		二九	四八	太子母、穴穂部間人大后崩ず。
六二二		三〇	四九	太子薨去。その前日、妃、膳大刀自薨ず（法王帝説）。
六二三		三一	薨後一	太子の命日に高麗僧惠慈死去。天壽國繡帳成る。
六二四		三二	二	
六二六		三四	四	
六二八		三六	六	
六二九	舒明	元	七	
六四二	皇極	元	二〇	
六四三		二	二一	入鹿、山背大兄王を攻む。大兄王とその一族斑鳩寺において自決。上宮王家亡ぶ。
六四五		大化 元	二三	

馬子、政を執る。

馬子、葛城縣を欲せしも、天皇許し給はず。

馬子死し、子、蝦夷、大臣となる。

推古天皇崩御。皇位繼承問題紛糾。

蝦夷、詔を矯めて田村皇子を立つ。

蝦夷、境部摩理勢を殺す。

田村皇子即位、舒明天皇。

皇極天皇即位。蘇我入鹿執政。

入鹿・蝦夷誅せられ、大化改新成る。

九、黒上正一郎遺歌抄

本書の著者黒上正一郎氏は、いわゆる歌人ではない。しかし、たくさんの歌を作られた。そしてその歌は、友への便りの後に書かれたものが多い。その中から五〇首ばかりを撰んでここに抄録し、著者を偲ぶよすがとした。（高木尚一）

手紙のはしに（大正九年六月二十七日――十九才）

あひまつりしその日よ空はうすぐもり大比叡がねはほのにけむりし

みことばにつながりを得て一信海にわれも入らむとおもふよろこび

こののぞみわれはもてりと思ふごとわれ生くらくのこゝちするかも

あゝ一信海われもつながらむと求むるこゝろそのこゝろにこそわれは生くるか

ありともへどなきかとおもふ悲しみよおなじなげきをおもひたまふらむ

櫨紅葉（大正九年十二月――二十才）

裏山は櫨紅葉して秋深く病みてひさしき窓にあるかも

今朝の空うら〳〵晴れて裏山の紅葉さやかに目にうつりくる

いたゞきしこのすりぶみを病み臥せる小床によみて更かしつるかも

ほの〴〵とあけわたりくれば裏山に今朝はさやけき鳥の声する

裏山に夕ゐる雲のうすひかりしみ〴〵秋の思ほゆるかも

友からのたよりをうけて（昭和二年五月――二十六才）

あたらしき道ひらけむと賜りしこの刷りぶみをよみあかぬかな

ことそぎて力あふるゝ言の葉のひゞきに我も力を得たり

もろともに力を協せゆくところみおやのみたま守りますらむ

三人のみ友のつどひ偲びつゝ力あるわざ我は思へり

三人のみ友とともにつどひてし都のことを思ひ出でつゝ

にごりみだれはてしなき世にまことなる道開くべきかなしきわざはも

みたよりにまた刷りぶみにあたらしきわざにはげまむ力をおぼえぬ

友　　に（昭和三年十一月十五日――二十八才）

くれたけの代々木の宮ををろがみて大御心を仰ぎましけむ

若き子が一つ心に祈ります心をあはれとみそなはしけむ

その日はも同じこゝろにひんがしのかたををろがみ祈り合はせき
いかならむことにあひても誠なる道をふめとふ大御歌はも
まことなるみちの教をつたふべきつとめは重くわれらにかゝれり
雲とほく別れて住めど偲びあふ心に生きて我ははげめり

友　　に（昭和三年十一月二十日――二十八才）

うすざむき風ふく夕べ新月のひかりは冴えてさびしかりけり
裏山の木々のもみぢもうらさびてわがふるさとも秋ゆかむとす
暮れてゆく空をながめて君いますひんがしのかた我はしたふも
今ごろは君いかにぞと筆をとるときにも思ふ勉(つと)むる君を
向陵も今は落葉のちりしきて筑波おろしの窓をうつらむ
しばらくも病みにし友も今ごろは寮にかへりてかたりますらむ

便りのはしに（昭和四年五月――二十八才）

ふるさとの鳴門の海のはやしほに生ひしわかめを君にさゝげむ
淡路島さやにうつらふ大瀬戸の海ぐさ君におくりまつらむ

むやの海に友をみとりしそのかみにめでしかほりのなつかしきかな
なつかしきむやのわかめのみからだによしとしきけばゝれしかりけり

友　に（昭和四年十月――二十九才）

はらからのかしこきこゝろいたゞきて身もよみがへるこゝちするかな
かく迄もみ心こめてたまはりし文はたゞなるたよりと思へず
なつかしき君がみやどに一ときはつかれしことも忘れてすぐしつ
さま〳〵のことに追はれて休むときあらぬがまゝにこの秋もすぐ
としごろのつかれ積れど大ぎみを仰ぐこゝろに生きしめられつ
かなしくも雄々しくませしみいのちのあとうつしくも迫りくるかな
今の世に教への道を開くべくつとむる君を思ふもうれしき
もろともにこの世にあひしそのことの今更かしこく思はしめらる
もろともにこの世にあひ得しよろこびを今更にして思ふころかな
もろともに心も身をもまもりあひてこの世にわれらつとめあはなむ

友　に（昭和五年二月十日――二十九才）

はらからのみ文(ふみ)みうたをいたゞきてけふも力となぐさめ得たり
もろともに大み教へを仰ぎますみ心偲ぶがありがたきかな
この信を共にしつとむる力よりみ国をになふわざは生れむ
闘争の説に代ふべき「和」のみちを今の世にこそあらはしつとめむ
くもりなき大御心のもとにして共にすゝまむねがひは果てなし
信を共に偲びあひ又たすけあふつどひはとはの力なりけり
なつかしきつどひのときのみたよりに泣かしめられぬ力を得つゝ

本原書は、

○A5判、本文三〇四頁クリーム上質紙使用、上製クロース装、聖徳太子御姿絵・御親筆・著者写真アート写真三葉、箱入

○頒　価　一八〇〇円

○発行所

社団法人　国民文化研究会

〒104 東京都中央区銀座七―一〇―一八　柳瀬ビル

振　替　東　京　六〇五〇七番

（この抜刷・正味一三〇ページ・頒価　五〇〇円）